

蔭でザハーリヤ師はとんだ災難にお遭ひなされましたよ。管長様がこの犬を御覽になられて、何といふ名かと御下問がありましたので、ザハーリヤ師は、『尊師さま、「お名前は？」と申します』とお答へになり、そのため譴責をお喰ひになりましたので。』

サヴェーリーイは涙を出して抱腹絶倒したが、やがてハンカチで眼を拭くと、かう呟くのであつた。

「あの真正直なザハーリヤは世にも有難い人物ぢやわい。あれこそまことの主の御器、まことの祈禱の書ともいひつべき男で、その類ひをわしは未だに見たことがない。一刻も早くあれを抱きしめたいものぢやなあ。」

と、ちやうど峙にさしかかつた二人の旅人の前には、生みの町の眺めが打展げられた。古への香りも床しい町、あり來りの町とは違ふ一風も二風も變つた町、そして特に、トゥペローゾフにとつては様々の追憶に充ち満ちた町なので、それを一瞥するや老人はその重壓に堪へきれず、どうとばかり後へ身を反らせて半ば眼をとぢた有様は、まるできららかな太陽の光の眩しさをまともに浴びたかのやうであつた。

明るい中に町へ乗り入れるのを避けるため、彼等は馭者に馬の歩みをゆるめるやうに命じ、やうやくあたりの黄昏れる頃ほひ、馴染の深い門の鐵環を鳴らした。『どなた？』と應へたのは、ほかならぬアヒュラの聲であつた。トゥペローゾフは手の指で涙をぬぐつて、十字を切つた。

「どなた様で？」とアヒュラは再びたづねた。

「わたしとサヴェーリーイ和尚にきまつてるぢやありませんか」と侏儒が答へた。

補祭は一こゑ何やら金切聲を立てると、昇降段の上から一足飛びにとびおりて、門扉をさつとばかり押し開きさま、まるで毬のやうに丸くなつて馬車へ駆けつけて、法主の頸つ玉にしがみついたまま、氣を失つてしまつた。

二人は、馬車の中で互ひにしつかり抱き合つたなり、いつまでも悲しげに啜り泣いてゐたが、その一方侏儒は、地面につつ立つたまま、靜かに、けれどいかにも幸福さうに、かじかんだ拳に顔を押し當てて泣いてゐた。

やがて思ひつきり咽び泣いてしまつた補祭は、何か口を利きたくなつた。彼はあやふくナターリヤ・ニコラーエヴナのことを尋ねようとしたが、はつと氣がついて巧みに言葉をそらすと、自分の足もとにじやれついでゐる小犬を指さして、かう言つた。

「ねえ、お師匠さん、こいつはわしの新しい飼犬で、『お名前は？』つていふんですよ！ とつても素晴らしい犬つころでしてな、こつちが笑つて欲しいと思ふと、即座につつこり笑つて呉れるのです。なんで甲斐もないことをよくよすることがいりませう！」

『甲斐もないこと』——と、堪へがたい胸の痛みとともにサヴェーリーイ師は思はず鸚鵡返しに口走りさうになつたが、辛くもそれを抑へて、ただ力任せにぎゆつとばかりアヒュラの手を握りしめたのである。

かなりの長い月日をアヒルラ補祭が、主人ともまた唯一人の住み手ともして守りつづけて呉れた自分の家にはいる時、法主はこの野育ちの大男の縮れ髪の油つ氣のないかさかさな分け目に接吻したが、やがて彼は一緒に部屋々々を一々見て廻りながら、今は臥す人もなくしよんぼりと立つてゐるナターリヤ・ニコラーエヴナの寢臺の前で十字を切つて、かう言つた。――

「なあお前、どうぢやらうかな。今さらわしら二人は別れ別れになることも要らんではないか、――一緒に一つ屋根の下で暮さうではないかの！」

「ようこそ仰しやつて下さいました。異存のありやうがござりませんわい、わしも實はそのつもりでをりましたので」とアヒルラは答へ、再び兩腕でもつて法主をかい抱いた。

といつた次第で、彼等は二人暮しをすることになつた。アヒルラが教會に出て勤行を修する傍ら家事を切り廻す、その一方トゥペローゾフは家に坐つて、ジョン・パンヤンを読んだり、思索に耽つたり、お祈りを上げたり、といつた工合であつた。

彼はごくたまにしか外出しなかつた。といふよりは、寧ろ、ちつとも外出しなかつたといつた方が當つてゐるくらいで、なぜ外出なさらないのですかと問ふ人があると、手短かにかう答へるのであつ

た。――

「さやうさ……いつもその……そのつもりぢやゐるのぢやがな。」

彼は全くのところ、いつも精神を集注してゐて自らを信すること篤く且つ堅い精神のみが營み得る、あの孜々として傍目もふらぬ生活を營んでゐたのである。

アヒルラは師匠に心配も苦勞も一切させまいと一心に努めてゐたので、そのお蔭で老人は精神を集注する上に多大の便宜を得たのであつた。

ところが好事魔多しの譬へ、この至福の生活も所詮はいつまでも續く定めではなかつた。アヒルラの行手には榮譽が待つてゐたのである。といふのはほかでもないが、この管區の僧正が恰も宗務院に參勤する番に當つて、他ならぬアヒルラを從僧に擇んだのであつた。縣市にゐる補祭長が健康を害してゐたので。

補祭とトゥペローゾフの生き別れは、まことに一掬の涙を禁じ得ぬものがあつた。元來がアヒルラといふ男は、つひぞ手紙といふものを書いたこともなければ、手紙といふものはどんな風に書いて、どんな風に發送するものやら、とんと心得のない男なのだつたが、それが此の際トゥペローゾフ師に宛てて手紙を書く氣になつたのみか、その意圖を實行したのである。

この手紙の奇妙きてれつな趣きは、當の本人の物の考へやうや暮しぶりの全體の調子に比べても、をさをさ劣らなかつた。そのそもその第一便は、彼が縣市からトゥペローゾフ宛に發送した手紙であつたが、その手紙を封入した封筒の表書が『トゥペローゾフ僧正殿、極秘、必親展』となつてゐる

のも頗る振つてゐたが、その内容に至つては更に一段と光彩陸離たるものがあつた。曰く、只今僧院に起居まかり在るつれづれ、師匠に代つて檢關係トローアデーに敵討ちを相果しました。すなはち一本の腸詰に『この腸詰を拙者は主人の許に持つて参るのです』と貼札して、それを彼の愛猫の頸つ玉へ縛りつけ、この荷物を背負つた件んの猫をおつ放して、僧院ぢゆうを駈け廻らせました、云々。

それから一月するとアヒルラはモスクヴァから手紙をよこし、この都がとても氣に入つてしまつたこと、しかし、この人達、とりわけ教會合唱隊の連中がとても狡くてお話にならぬこと、彼等はどう二度もラムポボと一緒に飲らうと呼んで呉れたが、『こちらはこのラムポボといふのがどういふ代物なのかは先刻實驗済みなのでありますので、この合唱隊の連中の面の皮の厚さにはほとほと呆れ返り申し候』などと書いて來た。

やがて暫くすると今度はペテルブルグから手紙が來た。その文面は、『敬愛し奉る祭司長サヴェーリイ師さま。只今修道院の宿舎にて素晴らしい暮しをしております。ここはまづ小さな僧院とでもいつた場所ですが、色んな誘惑の多いことといつたら呆れるばかりです。何しろ賑かな都大路の只中にもあるも同然なのですから。この賑かさの中にもても矢張りお師匠様が戀しくなりません。お師匠様もここにゐて下されたら、二人して色んな珍しい物を觀て歩くのがどんなにか楽しいこととせう。お師匠様の有難い御忠告は肝に銘じて忘れず、身持を正しくして一同の尊敬的になつておますから御安心下さい。これはわたしが例のモスクヴァのラムポボを飲む氣にならなかつたことでも、お分りのことと思ひます。わたしは極く少ししか飲酒せず、それももし一切飲まないとなるといい知合ひを失く

してしまふ惧れがあるので、おつき合ひで飲むだけです、當地にはいい人が澤山おますが、わたしども目から見て本當に立派な補祭といへる人物はをりません。みんな甲高いテノールばかりで、われわれに言はせればせいぜい墓地でしか使へない代物です。中には天晴れ名人氣取りである奴もおますが、どれもこれもわれわれと違つて、生ぬるい歌ひ方をする奴らばかりで、勤行の時はいつも平つたい朗讀調を使ひ、調子外れになることさへよくあるので、合唱隊の方でうまく合せて行くことが出來ない始末です。わたしはこの方面には些か心得があるので、奴等の妙な流行を眞似ずに、自分の流儀で勤行をやります。そのため、一介の旅の僧であるわたしを、商人たちが招いて、大市の門の下に張つた天幕の中で祈禱を修して呉れるやうに頼んで來ました。禮金は失禮に當るからと遠慮して、その祈禱の謝禮に薄絹のハンカチを三枚呉れましたが、ちやうどお師匠様のお氣に召しさうな品ですから、お土産に持つて歸るつもりです。お風邪を召しませんやうにね！ 退屈なことは勿論かなり退屈です。それは一つにはわたしは學のない男だからですが、もう一つには當地がどこへ行くにも遠路を遙々行かなければならないからです。當地では御馳走といふと大抵は珈琲です。それは兎に角わたしは路が遠いのでほとんど誰のところにも行きません。みんな郊外へ出なければならぬからです。わたしは馬車の屋上席に乗ることにしてゐますが、これでは郊外へ行くことは出来ません。しかし田舎にお住ひのお師匠様にはこれがどんなものだかお分りにならないでせう。まるでとても高い家の屋根の上に坐つてゐるやうなもので、降りる段になると相乗りの客一同の頭の上をびよりと跳び越えるのに大いに熟練を要しますが、婦人の場合には服装の關係で、これはとても出來ない相談です。序でな

がら當地の辻馬車の馭者などは頗る嘲弄癖のある奴で、われわれ僧侶仲間が辻馬車を備つて、ひどく安い賃銀を渡しますと、奴らは直ぐさまお互ひに大聲で叫び交ははじめます。「およしなさいよ、坊さん、その馭者は大變な奴でしてね、昨日も司祭さんを水溜りの中へ轉げ落したんですぜ」といつた調子ですから、わたしは辻馬車を備はないことにしておきます。昔なじみのヴァルナーフカにこのあひだひよつくり出會ひましたが、どやしつけてゐる暇ありませんでした。といふのはお互ひにすれ違ふ乗合馬車の屋上に坐つてゐたのでしたから、わたしは指を立てて威かす眞似をしてやるのがせいぜいでした。因みに申しますと、あの男は當地に来てから何だかひどく憔悴してしまひました。あなた様がまだ僧職停止中であられて、禮拜式に出て御自分のことを祈ることが出来ないといふ不仕合せのことは、決してよくよなさらぬやうに願ひます。といふのはわたくしが一生懸命に、及ばずながらその埋合せをつけてをりまして、天なる主はそれを照覽なすつていらつしやるからです。あなた様は田舎のお寺で自ら御自分の上をお祈りになれないにしても、あなたの下には一人の男がゐて、これが都にゐてあなた様に代つてお祈りを上げてゐるのだと思召して、どうぞ御安心くださいまし。あの救國の將軍、武勳赫々たるクトゥーゾフ公爵の葬つてありますカザン本寺や、礎から頂上まで大理石づくめに張りまはしてあるイサーク本寺から、その男があなた様のために祈禱を上げてゐるのです。あなた様のために都で祈禱を上げてゐるといふ男は實はこのわたしです。と申すのはわたしは、追善のお經を上げる時でも、その御本尊の名は大きな聲で誦み上げながら、人に聞えぬやうに小さな聲で、おなつかしいサヴェーリイ様、あなた様の名前をそつと唱へて、あなたの上をお守り下されと心から

の熱いお祈りを、この都から天主様に捧げてをります。あなた様が上役の御機嫌を損じて、みんなの前でとんだ辱しめを受けられたことは、今更及ばぬことながら、返す返すも残念でなりません。どうぞあなた様も、あの『もう長いことはないよ』といふやうなお言葉は、ふつつりお考へにならぬやう、お口にも出されぬやうに願ひあげます。それを申されるとザハリーヤ師もわたしも、まことに悲しくて悲しくなりませんし、もしそんなことがあつたらわたしは正直のはなし、あなた様のあとにおめおめ生き残らうとは思ひません。』

としたためて、その下にかう署名がしてあつた、——『古スケールイ・ゴロド 市郡僧院管區補祭長の代理として暫し都に滞在中なる補祭アヒルラ・デスニーツイン拜。』

そのうちにまた一通アヒルラから手紙が來たが、その文面は、『まことに幸運にもプレボテンスキイと會ひました。昔のいきさつもあり、はじめは喧嘩になるに違ひないと思ひましたが、會つてみるとまるつきり豫期したところとはあべこべにて、果てはこの男のやつてゐる新聞の編輯局をまで訪れました。何しろヴァルナーヴァは今では押しも押されぬ編輯長なのですから。そこでわたしは色んな「文士」(と書いてあつた)に紹介され、ヴァルナーヴァと心から和睦をしました。和睦をすることになつたのは、ヴァルナーヴァがとて不仕合せな男になつた(とアヒルラは記してゐた)からなので、と申しますのは他でもありませんが、つい最近この土地のさる令嬢と結婚しましたところ、これがまた比類を絶した驕馬にて、世間の噂ではヴァルナーヴァを打擲に及ぶことさへ度重なる由で、そのためヴァルナーヴァはがらりと人間が變つてしまひました。もし家内が怖くさへなけりや、自分

の新聞で堂々と神の擁護をすることも敢て辭さんですと、自分からわたしにその胸中を明したほどで、ビジュニーキナ夫人のこと、とりわけテルモシヨソフのことは、悪口のあらん限りをつくして罵つておました。因みにこのテルモシヨソフは大層立身して、大枚の月給にありついたのですが、その職掌といふのが潔白人達を監視するといふ大きな聲では言へない商賣でした。ところが魔がさして金銭を貪るやうになり、果ては贋札をどしどし使ひ廻すやうになつたので、今では牢屋にはいつてゐます」云々。なかんづくアヒュラが最も得意だつたのは、劇場へ行つてオペラ見物をしたことで、その印象を次のやうに書いてゐる。——「合唱隊の連中と一緒に平服を着て、一番てつぺんの席で「帝にささげし命」といふオペラを見物しましたが、色とりどりの聲のすばらしい歌ひぶりに興奮して夜どほし感涙にむせびました。もう一度はまた、やはり平服に着かへて、ほかならぬアヒュラ王の出てくるオペラを見物に行きました。但しこの人物は爪の先ほどもわたしに似てはをりませず、ただ甲冑に全身を固めた役者がとび出して来て、踵のことを何やらしきりにこぼすだけのことでしたが、わたしにこれだけの装束を貸して呉れたら、もつと凄い大音聲でやつてやるのと思ひました。この男をのけたあとの役ときたら、どれもこれも邪宗門まるだして、ほとんど裸も同然のむき出しの身なり、これでは鰥夫や獨り者には目の毒でせう。」

間もなく三通目の、そして最後の手紙が来て、そろそろ歸郷する由を報じて来たが、やがて或る灰色にたそがれかけた夕方、アヒュラはまるで吉報をもたらした使者のやうに、不意にその姿をトゥベローゾフの前に現はした。

再會の挨拶が一わたりすむと、サヴェーリイ師はすぐさま表へ駆け出して行つて窓の鐵棧をおろしたが、それは物見高い人々の眼から、アヒュラの悦ばしき歸宅を秘めようと思つたのである。

二人の歡談はいつ果つべしとも見えなかつた。そのあひだにアヒュラはサモヴァルを完全に飲み乾してしまつたが、トゥベローゾフ師はまたあとからあとからと茶碗に注ぎ足して、かう言ひ添へるのであつた。——

「さあお飲み、ねえお前、もつと何かおつまみ」——そしてアヒュラがお茶を飲みほしてしまふと、彼はかう催促するのであつた、「ぢやあ一つ、その先を話してお呉れ、それから何を見たかね、何を聞いたかね？」

そこでアヒュラは物語をつづけるのだつた。その話しつぷりが實にまた何ともいへない奇抜さで、雜然、大袈裟、支離滅裂をきはめてゐたが、なかでもサヴェーリイ師を呆れさせたのは、アヒュラがその話の中へ適切であらうが適切でなからうが一切お構ひなしに、頗るもつて奇妙至極な言葉を挿入することであつた。そんな言葉はペテルブルグへ出る前には使ひもしなかつたのは勿論、恐らく知つてさへもゐなかつたに違ひない！

例へていふと、いきなりこんな突拍子もないことを喋り出すのである。——

「いやもう、ねえサヴェーリイ師、まことにはやえらいコンブイネーションでしてねえ（しかもこのブイといふところにうんとこせと力を入れるのだつた）。」

或ひはまた、「相手がさうぬかすが早いか、わたしはかう竹筥返しをしてやりましたよ——ジュ・

ヴウ・ペルデュ、そりやあ君、なんぼなんでも砂糖のデュデュだぜ、つてね。」

トゥベローゾフ師は、感慨ぶかい氣持でアヒュラの物語を傾聴してゐたのであるが、しかし今いつたやうな氣障な珍語が頻繁にとび出すに及んで眉をひそめて、やがて見るに見兼ねてかう言つた。――
「そりや一體なんの眞似かな。……なんだつてお前はそんなつまらん合の手を入れる癖を覺えたのかな？」

ところが根が夢中になると方圖の知れないアヒュラのことだから、いざ都仕込の猿眞似をサヴェーリイ師の前に洗ひざらひ御披露に及ぶ段になると、ことは遣ひの斟酌などはとても出來ぬ相談であつた。

「いやなにサヴェーリイさま、御心配には及びませんや、今どきは何を喋つたつて平氣ですよ、――口には税金はかからないんでね。」

「なんで平氣なことがあるものか？ 耳障りで聞いてはをれんがな。」

「おつとどつこい！ そりや慣れないせゐですよ。わたしなんざ、今ぢやどんなことを聞いても、悉くもうナンセンスですなあ。」

「それ、また始まつた。」

「と仰しやると？」

「又しても今、厭らしい言葉を使つたではないか？」

「ナンセンスでさあ！」

「ちえつ、胸がわるくなるわい！」

「なぜね？……文士連中はみんなさう言ひますぜ。」

「だからさ、奴等には勝手に本を讀ませておけ。奴等が机の前に坐つて、『ノンセンス』とでも何とでもほざくのは勝手だが、われわれまでがそのノンセンスなどといふ新語の御厄介になる必要がどこにある、れつきとしたロシヤ語の『くだらん』で澤山ではないか？」

「まつたく仰しやる通りですなあ」とアヒュラは賛成して、ちよつと首をひねつた擧句に、『くだらない』の方が『ナンセンス』なんかよりすつと自分も好きだと附け加へた。

「情ない次第ですなあ」と彼は、自説を覆しながら言ひ添へた、「その『くだらない』なんて字をまごまご使はうものなら、忽ち物笑ひの種にされちまふんですからねえ。何しろあちらの連中ときたら、神は無しとか、やれ何だとかかんだとか唐人の寢言みたいなことを、のべつナンセンスするんですからねえ。最初のうちは聞いてゐても身の毛がよだつやうな氣がしますが、ぢきに言ひ負かされちまつてねえ。」

「いつまでも身の毛がよだつやうでなけりやいかんのう」と、トゥベローゾフは柔和な調子でささやいた。

「いやまあサヴェーリイさま、さうつけつけ言はないで下さいよ。だつて相手がちやんと證明して見せるものを、こつちは手のつけやうがないぢやありませんか。」

「何を證明して見せるのかな？ そりや何のことかな？ そのお前の言ふのは一體？ 連中が何を

お前に證明して見せたのかな？　もしやその、神は無しといふことではないかの？」

「ええ、お師匠さま、それを證明して見せたんで……」

「ちよつとは口をつつしみなさい、アヒュラ！　お前は善良な百姓であり且つキリスト教徒ではないか。——早く十字をお切り！　まったく何といふことを言ふんだ。」

「だつて仕方がないぢやありませんか？　わたしだつて何も、ねえお師匠さま、好き好んでゐるわけでもないんですけど、ホワクトといふものには勝てませんからねえ。」

「またそんな『ホワクト』なんてことを言ふ！　ぢや訊くが、一たいどんな事實をお前は發見したのかな？」

「いやそれは、サヴェーリイ様……わざわざあなたのお心を騒がせる必要もないですからねえ。だつてあなたは例のバンヤンを愛讀なすつて、今も昔とちつとも變らず御自分の單純な考へ方を信じていらつしやるんですからねえ。」

「そのバンヤンぢやとか、わしの單純な考へ方ぢやとかいふことは、放つて置いて貰はう。それよかお前は自分の言ふことをよくよく考へてみるがよいぞ。」

「仕方がありませんや、ホワクトですもの！」と、アヒュラはほつと溜息をして答へた。

トゥベローゾフは當惑の眉をひそめながら席を立つと、神の存在に對する疑念がよつて以て生ずるやうな事實を即刻自分の前に開陳して見せるやうに、アヒュラに向つて要求したのである。

「そのホワクトはですな、誰の身にも巢くつてピョンピョン跳ね廻つてゐるんです」と補祭は答へ

て、更にその説明として、それはつまり蚤である、ところが蚤といふものは鋸屑さへあれば誰でも造れるのであるから、すなはち萬物は自ら發生するものであることが分ると、述べ立てた。

かうした心からなる無邪氣な告白を耳にしたトゥベローゾフは、何と答へていいものか直ぐには決し兼ねたのである。ところがアヒュラは、一たんこの方角へ口火を切つたとなると騎虎の勢ひで、ペテルブルグ仕込みの新知识を次から次へまくし立てるのであつた。

「しかもですな、正直のはなし今日のところぢや」と彼は言ふのだつた。「もし吾々がこのてんで取るに足らん蚤から先へ一步を進めるとすると、それなりだいたい何一つ見えなくなるんです。だつて吾々の手許にはぢやんとした、つまり本當の書物もなければ、地球儀も望遠鏡もないんですからねえ。その無知の闇の深きことたるやですな、敢て論議の餘地なしと斷言して憚らんですなあ！　とにかくわたしはあちらで、文士連中と同席して、ときには半時間も一緒にゐたものですが、その際はつきり分つたことは、謂ふところの宗教なるものは存在しない。その一方、蚤といふものは動かすべからざる事實だ、といふことなんです。科學ではさうなるんですよ。……」

トゥベローゾフはただ喋つてゐる相手の顔をちらつと見て、眼をぱちくりさせると、かう訊ねた。——

「ぢや一體お前はこれまで何ものに仕へてゐたのかの？」

補祭はちつともひるまずに、片手で自分の腹を指すと、かう答へた。——

「みんなが仕へてゐたものと同じことさあ、つまり財寶にでさあ。人間が何のために汗水ながす

か、その答は科学ぢやちゃんとお出来上つてゐるんで、——つまり食物くわもののためなんですよ。腹一杯食つて、ひもじい思ひはしたくない、つて譯なんです。假にもし食ひたいと思はないとしたら、何にもせずにあるに違ひないんです。これがつまり生存せいぞん（補祭はこの『せー』をやけに伸した）競争つていふものなんです。これがなかつたら萬事消滅ですよ。」

「ぢやがな、ここを一つまあ考へて御覽」とトウベローゾフは答へた、「ところが神様は、何の不感ぜられない身でありながら、しかも世界を創られたではないかの。」

「それはその通りです」と補祭は答へた、「神様は世界を創られたのです。」

「そんなら、なぜお前はこの世界を否定するのかな？」

「いや、否定なんぞしませんよ」とアヒルラは答へた、「ただわたしの言ふのは、理窟上のホワクトから出立することですな、つまり蚤が鋸屑から出来るやうに、宇宙といふものもひとりでに湧いて出たのかも知れん、といふことなんです。あの連中に言はせると、神は『酸素』だといふんです。尤もわたしはその酸素がどんなものやら、さつぱり知らんですがね！ いや、だから言はんこつちやありませんよ、あなたが話をやたらに方々へ向け變へるもんだから、またわたしには何が何だか分らないつちまつたぢやありませんか。」

「今の酸素とやらいふ話はどういふ端緒つうそで飛び出して來たのだつたかの？」

「知りませんよ、さつぱり……いや、サヴェーリイ様、その話はもうそれだけにしといた方がいいですよ。」

「いいや、お前、そんな考へをその儘お前の中に放つて置くわけには行かんわ！ 言つて御覽、今お前の言つた酸素といふのは、どんなきつかけで飛び出して來たのぢやつたかのう？」

「ほんとに知りませんが、サヴェーリイ様、後生だからその邊で勘辨しといて下さいよ！」

「ひよつとするとその酸素といふのは、何の端緒つうそもなかつたのかも知れんな？」

「さつぱり譯の分らん代物でさあ！ あんな物くそくらへでさあ！」

「して、あれには結末くつまつもないのかの？」

「サヴェーリイ和尚つてば……そんな物はいつそ豚にでも呉れてやつた方がましですよ、その酸素なんて野郎は。端緒つうそがなからうと、結末くつまつがなからうと、どうとも勝手にしやがれでさあ。わたしどもには、どうせ縁のない代物なんで。」

「だがお前は、その端緒つうそもなければ結末くつまつもないといふことがどういふものだか、それが分るかな？」

アヒルラは、分りますと答へた。

それから、破鐘のやうな聲で先をつづけた。——

『三位一體としてねがひ奉る唯一の神、かれこそは永遠なれ、すなはちその在ありすこと初なく、終

なく、恆にましまし、今もましまし、あすもまします。』

「アメン！」とトウベローゾフはにつこり笑つて唱へたが、やはりにこにこしながら椅子から腰を

浮かせると、親しげにアヒルラの手をとつて言つた。——

「あつちへ行かう、お前に見せたいものがあるでろう。」

「どうぞ」と補祭は答へた。

そこで二人は手に手を組んで部屋を出ると、庭先をつき抜けて、やがて燦らかな雪に一面被はれた野菜畠のまん中へ出た。ここで老人は立ちどまると、二人が永年のあひだ祭壇に奉仕して来た本山の十字架を補祭に指さして見せ、黙然とその指を地面の方へ移して、さて嚴かな口調でかう言つた。

「さあ、早く跪いてお祈りを上げるのだ！」

アヒルラは跪いた。

「かうお唱へ、『神よ！ 罪ふかきわれを清め、われを憫みたまへ』とな。」サヴェーリイはさう唱へたが、唱へ終ると自分からまづ最初の跪拜を行つた。

アヒルラはほつと溜息をつくと、師匠についてその通りのことをした。莊嚴な夜半の静寂のさなか、月光を浴びて白々とした人氣のない野菜畠では、彼の熱した額が冷たい雪に觸れるまでの叩頭が、正しい間をおいて何べんも繰り返されはじめ、それとともに、『神よ！ 罪ふかきわれを清め、われを憫みたまへ』といふ祈りの快い哀哭を伴つたひろびろとした歎息がながれると、すぐそのあとを、『神よ爾が僕を審きより免させたまへ』と願文を唱へる法主の聲が追ひかけるのであつた。懺悔聽問僧と懺悔びととが一緒にお祈りを上げてゐるわけだつた。

古スタイル・ゴロド 市の上空には長いことアヒルラの歎息がただよつてゐた。これまでは、持前の大歌唱曲カンタタと陽氣カウなどら聲とを以てこの土地の人々を残らず微笑を浮べながら聴き惚れさせてゐた無類の道化者であり慰め手であつた彼も、自ら罪に躓いた今になつては醜然として禱る者となつて、われらの上に向ける

られる正義ただしき天あめの忿怒ぼんごを制めんものと、自分のためにもまたこの世のためにも祈るのであつた！

おお、眞紅の駒にまたがつて、朝まだきの川霧の中から、口笛を吹きながらわれわれの前に躍り出たあの往年のアヒルラとこの今のアヒルラとは何といふ違ひであらう！ 往年のアヒルラを夜來の雨のあがつたあととすがすがしい朝に譬へるなら、今の彼の姿は、さながら晝間のあらしの後に来た夕焼けのやうに耀いてゐると謂へるだらう。

トゥペローゾフ老法主は灰色の袈裟けさ下一枚の姿で浴室の昇り段に腰かけたまま、アヒルラの祈禱のあひだちゆう頭かぶりを振りながら、彼の跪拜の數をかぞへてゐた。その度數がやがて定めぬ數に満ちると、法主は立ち上つて補祭の手をとり、ともどもに穩かに家の中へ戻つて來たが、補祭は寢床ねどにづく前にもう一度サヴェーリイの前にやつて來て、かう言つた。

「ねえ、お師匠さま、實は先刻お祈りを上げておました時……」

「うむ？」

「なんだか地びたが震へてるやうな氣がしたんで。」

「主は祝福すべき哉、そのやうな祈りをお前にお與へになるとは！ 今はもう心安らかに横になつて眠るがよいぞ」

と法主は答へ、二人とも安らかに夢路に入つた。

ところがアヒルラは、翌る朝めざめてみると、なんだか自分を抜け出してどこかほかの世界に來てしまつたやうな感じを覺えた。まるで自分が不意に何かを振り棄てて、何か別の物を見つけたやうな

氣持がしたのである。その見つけたものは、背負つて行くにはだいに重い、さりとして今更それと別れることは出来ないし、また別れる氣もしないのであつた。

これこそは困惑し打震へる魂にとつとばかり押し寄せた、信仰の福^{さいはひ}みてる浪だつたのである。その魂がよみがへらんが爲には、病んで一旦は死ななければならなかつたのだが、今この聖なる御業^{わざ}は果されたのである。

痴れたるアヒルは賢い者となつた。彼は暫くはひたすら寡黙を求めてゐたが、やがて自分が道心堅固になつた見極めがついたところで、四五日してからサヴェーリイに尋ねた。

「お師匠さま、どうぞ教へて下されませ。もしひよつとして神様のみこころで、わたしがよしや僅かの年月にせよ孤りでこの世に生き永らへることになりましたら、どのやうにしてこの自分を矯め直したら宜しうございませうか？ わたしは自分の腕力に倣つておりましたが、今は迷ひの夢もさめて、もはや腕力などは頼みにいたしません。……」

「さうぢや、これまでのお前はいかにも力もあり強くもあつたが、そろそろお前にも、自分で帯が締められず、他人に締めて貰はねばならぬやうな時がやつてくるのぢやよ」とサヴェーリイは答へた。「ところがわたしの頭の働きときたら、わたしの腕力なんかより一層頼みにならないんです。だつてお師匠さまも御存じの通り、わたしは理窟がかつたことになるかと直ぐごちやごちやになつてしまふんですからねえ。」

「自分の心臓^{こころ}を待むがよい、それは確かに鼓動してをるからのう。」

「ですが、何か言はなければならん場合になつたら、何と喋つたらいいものでせう？ わたしの心臓は口を利きませんので。」

「心臓に耳を澄まして、その呻きをそのまま口に上せるがよい。して、塵の俗世からお前の身に跳びついて来る蚤は振りはらふのぢや！」

アヒルは心臓を片手でおさへると、一たい今お師匠様の言はれたことはどんな風に行はれるのであらうかと、それを考へ考へその場を退つて行つた。とはいへ何がなしに一種の豫感とでもいつたものが、お前は程なくぢきに孤りぼつちになるぞ、そして力もすつかりなくなつてしまひ、『他人に帯を締めて貰ふ』やうになるぞ、と語つてゐる聲がありありと聞えるのであつた。

五

アヒルの不氣味な暗い豫感のみごと^{みごと}に當つてしまつた。ひ弱な上に、たび重なる色んな出来事のために精根からしたトゥペローゾフは、もはやこの世の人ともいへないほどであつた。彼は自ら補祭にいひつけてやらせたあの跪拜を夜更けに勘定してゐるうちに風邪をひいて、そのまま病みついてしまつたのである。重態といふわけでもなかつたが、ひどく心に喰ひこんでしまつたので、あつといふ間にもはや明日の日も知れないことになつてしまつた。

そろそろ死といふもの手に陥ちさうだと観念しながら、法主のただ一つの歎きの種は、自分の閉門の期限がまだ切れないことであつた。アヒルラにはそれがだんだん分つて來たし、その中でも、根本的な悲しみが何處にあるかを覺ることも出來た。

つまりトゥベローゾフとしては、罰を行はれつつある者として死ぬのが厭だつたのである。彼は地の權力によつて赦された者として天なる權力の前に立ちたかつたのだ。彼はアヒルラに口述して一通の書面をしたためさせたが、それはその筋に自分の病氣を報じ、この際特別の御斟酌をもつて、自分に課せられた閉門の期限を縮めていただきたい、と哀願したものであつた。この手紙は發送されたが、その返事は待てど暮せど來なかつた。

トゥベローゾフ師はべつに何も言はなかつたけれど、アヒルラは自分の心臓の聲にしたがつて、老人のみとりには番僧のパヴリユカンを残して、二頭立ての驛馬車を備ふと、なんの許しも乞はずにまっしぐらに縣市へ飛ばした。

彼は説明に當つてかれこれと多辯を弄しこそしなかつたが、然るべき當路の人に自分の持つてゐる材料のありつたけを開陳して、どうぞ特別のお計ひを以てトゥベローゾフ師を、即刻御赦免がひたいと哀願したのである。が、この奔走も遂に實をむすばなかつた。一たいわが國の要路の方々といふものは、或る種の特質があるために實に屢々下からの拒絶に遭ふものであるが、今度も依然その特質をしつかり有してゐることを示したのであつた。つまりその特質といふのは一步も譲らぬ氣象であつて、今も補祭の請願に對して下した判決は、トゥベローゾフについて決定せられたことは總て履行せ

られざるべからず、それは恰も天命によつて定められた一切が成就せられなければならぬと同様である、といふのであつた。

アヒルラは又しても例の激怒の發作を感じたけれども、やつとのことで腹の蟲を抑へて、縣市へ出て來た時と同様の電光石火ぶりで家へ引つ返し、トゥベローゾフには一ことも漏さなかつた。しかし、老人は彼の出掛けたわけをちゃんと見抜いたのみならず、彼の持ち歸つた返事の内容までも、その眼の中に讀みとつたのである。

自分の冷えゆく手で補祭の手をしつかり握りしめて、サヴェーリイはかう言つた。――

「まあさうくよくよせぬがよいわ。」

「いや、くよくよなんぞしちやをりませんわい」とアヒルラは答へた。「あなた様がこれだけ主の前に一生涯お仕へになつても、まだ仕へ足りないものでせうかねえ！」

「主にお禮を申さねばならん……わしの智慧と分別を開いて下されたのはあの方ぢや、あの方のみ業が拜めるだけの眼を開いて下されたのもあの方ぢや」と老人はつぶやいて、ほつと溜息をつくとき、そのまま兩眼をとぢた。

アヒルラは今にも死にさうなこの人の顔とすれすれに踏み込んで、その黒ずんだ眼蓋の上に老いの涙のこぼれてゐるのを見た。

「それはいけませんよ、ねえお師匠さま」

と彼は親身な調子でトゥベローゾフに言つた。

「なに……が……?」と老人は鈍い聲でたづね返した。

「なぜ人間を怨まれるのです?」

「それはお前の思ひ違ひぢや」と病人は弱々しい聲でささやくと、アヒルラの手を握りしめた。アヒルラの代りに今度はニコライ・アフナーンエヴィチが縣市へ駈けつけたが、それも次のやうな斷乎たる言葉をのこして出發したものであつた。曰く、――

「面前に罷り出たら最後、色よい返事を貰へぬかぎり挺子でも動かんつもりですぢや。さうとも、わしも七十ぢやから、このわしを、今さら監禁するわけにも行くまい。なにしろわしは片輪ぢやからな、不具ぢやからな!」

補祭は彼の出發を見送りに出たが、自分は病人のみとりに残つた。

アヒルラとしては、トゥベローゾフのこの悲嘆を軽くするためなら、自分の力や強さはもとより、彼が自分にとつて苟くも貴重なもの大切なものと認め得る一切を一つ残らず投げ出しても悔みはしなかつたのだが、しかし惜しいかなそれは彼の力の及ばぬところであり、且つは今となつては最早手後れであつた。死の天使は枕邊に佇んで、脱け出る靈魂をその手に受けとらうと身構へてゐたのである。それから二三日たつてアヒルラは、病人の寝間の片隅ですすり泣きながら、ザハリーヤ師がトゥベローゾフの枕もとにかがみ込んで、法主のする末期の懺悔を聴聞する有様を眺めてゐた。だがこれは一體どうしたことだらう?……ああしてベネファクトフ師が急にからだぢゆうわくわくと取り亂したのは、一たいどんな罪障があつてサヴェーリーイ老人の良心に巢喰つてゐたのだらう。のみならずベネ

ファクトフ師は、いま自分が、一切他の立會人を避けなければならぬ秘儀を執り行つてゐることさへも忘れてしまつたらしく、大きな聲でもつてサヴェーリーイ師に向つて、誰やらがした何やらの罪を赦しなさいと要求したものである! まさに幽明境を異にせんとする間際になつて、サヴェーリーイがそれほどこまで否を通しつづけるのは、そも何ごとなのだらう?

「お心を安らかに持つて! お心を安らかに持つてお赦しなさい!」と、おだやかではあるがしつかりした口調で、ザハリーヤは言ひはるのだつた。「お赦しなさんなら、わしもあなたを宥しませんぞ……」

眞蒼になつたアヒルラはがくがく顫へながら、今にも心臓がとまつてしまひさうな思ひで、一語をも聞きもらさじと聴き耳を立ててゐた。

「あなたの命がまだあるうちに、生命ある神としてわたしは、あなたにお願いするのですぞ……」とザハリーヤは聲高に叫びかけたが、そこで言葉をきると、先をやめてしまつた。

瀕死の人はわなわなと半身を起しかけ、またどうと後へに倒れたが、今度は片手をのばして自分の胸の上に十字架を置き直すと、祝福をしながら、満身の力をふりしぼりつつ、とぎれとぎれにかう唱へた。――

「わしはキリスト教徒として、……彼等が萬人の前でわしに加へた罵言雑言は赦すが、しかしながら、彼等がいたづらに死語を楯にとつて……この世で……神の生れるみ業を害ふに至つては……」その瞬間の莊嚴の氣は、ますます嚴肅さを加へて來た。サヴェーリーイはごくりと喉を鳴らすと、ま

るで謔言のやうに先をつづけた。――

「この悲哀あはれしみばかりは、わしは天あめなる主しゅの……御座ごくらにまで……持つて行つて、自分からその證人に立つつもりぢや……」

「お心を安らかに、お赦しなさい！ 彼等のした一切をお赦しなさい！」と両手をもみしだきながら、ザハリーリヤは絶叫した。

サヴェーリイは眉をひそめると、ほつと息をついて、「さいはひなるかなわれ、われ柔和なればなり」とささやくと、それにつづいて思ひもかけずしつかりした聲音で、かう言ひ足した。――

「爾がみ名を崇め愛する者らの裁きによりて、無智なる者らの智を開かせたまへ、而して盲たる輩やから、邪なる輩の無慈悲をば赦させたまへ。」

ザハリーリヤはいかにも靈の幸福にみち溢れた微笑を浮べて空をふり仰ぐと、サヴェーリイの顔の上に十字架を差し出して祝福を與へた。

その顔はもはや動かさず、眼は上をみつめたまま、光も失せてしまつた。トゥベローゾフは將に息をひきとらうとするのである。

アヒュラはがくがく顫へながら、慟哭の聲をふりしぼつて師匠のもとへ走り寄ると、しやくりあげながらその胸の上に身を投げた。

臨終の人は最後の力をしぼつて自分の片手をアヒュラの頭まで持つて來たが、それと同時にやはや末期の喉鳴りがごろごろと鳴りはじめて、折しもザハリーリヤが涙ながらに誦んでおたしめやかな臨終

の祈禱のつぶやき聲と入りまじるのであつた。

かくしてトゥベローゾフ法主はその生涯を終へたのである。

六

サヴェーリイの死はアヒュラに震撼的な印象を與へた。彼が咽び泣き且つはさめざめと涙に暮れる有様は、まるで男子のやうではなく、婦人がそれなくしては生きてゆく甲斐もないと思ふものを喪つて泣き明す有様にさながらであつた。それはさうとして、司祭長トゥベローゾフの死は、町ぢゆうの者にとつても一大事件であつたことは言ふまでもない。故人のために祈りを捧げぬやうな家は一軒もなかつたのである。

故人の家には入れかはり立ちかはり人々の群がやつて來た。この潔白なお棺に告別の跪拜をささげようとして來た者もあれば、お棺の中で司祭がどのやうな寢姿をしてをられるかを見ようとて來た連中もあつた。サヴェーリイ師の亡くなつたその夜更けになつて、侏儒のニコライ・アフナーシーエヴィチが故人の閉門を解く旨の赦免狀を持つて歸つて來たので、サヴェーリイはゆつたりと幅ひろく裾をひいた正装の法衣をまとひ、頭には球帽を戴いて棺に移し入れられた。法主の家では追善の供養がひつきりなしに執行されたが、熱い心から訪れて來た司祭が、經机の上に置いてある袈裟と聖帶をまとつ

て追善の經を誦まうとする段になると、その司祭がどこの誰であれ、アヒルラ補祭は即座にその人に頼んで自分の聖帯に祝福をして貰ひ、自分も勤行に加つて熱心に祈禱を上げるのであつた。

二日目にはいよいよお棺も出来あがり、司祭を納棺する場合いままほわが國の若干の土地に名残をとどめてゐる昔ながらの風習にしたがつて、壯嚴な怖ろしい儀式がはじまつた。それは集つた僧侶たちが、いづれも喪の法衣をまとひ、蠟燭を手に手に、サヴェーリーの遺骸を昇いで巨きなお棺のまはりや三度まはるのであつたが。そのあひだアヒルラはその死者の手に香煙縷々たる香爐を持ち添へ、死者はあたかも自らその香爐で自分の冷たい棺に香を焚きしめるかのやうに見えるのであつた。この儀式が済むと、今は亡き法主は棺に納められ、アヒルラを除いた一同は、思ひ思ひに辭し去つた。アヒルラはその夜この家に、亡き自分の心の友とともに一夜を明したが、そこで起つた或る出来事は、アヒルラ自身こそ氣づかなかつたものの、その代りに他の人々が氣づいたのであつた。

七

補祭はサヴェーリーが亡くなつた時からずつと寢床に入らず、この不眠の三日三晩にかけて加へて、久しいあひだ故人のみとりに絶えず氣を張りつめてゐた疲れも手傳つて、アヒルラのさしも鋼鐵のやうな神経も極度に昂ぶつてしまつた。

これまでの補祭は主として本能や激情に驅られて動く傾向があつたが、さういつたものがすつかり鳴りを潜めてしまひ、その代りに従來は彼の本性でなかつた一種の精神状態が現はれて、くつきりした形をとつたのである。

彼の昔ながらの軽々しい上つ調子なところが消えて、一つことにじつと思ひを凝らす重厚味や、自己に深く沈潜する傾きが、それに取つて代つた。アヒルラは顔色も悪くならず、眼光も衰へず、寧ろ逆に彼の皮膚は薔薇色のほんのりした下色に輝きを帯びたほどであつた。彼は貫きとほすやうなはつきりした眼光をもつて一切を見、人の話は恰もその音が自分の身うちに響き返りでもするかのやうに一語一語を聞きとり、かうして今までは考へてもみなかつたやうな事を澤山に理解するのであつた。彼は今や、亡くなつたサヴェーリーがしたいと望み肝膽を砕いてゐたことを残らず理解して、故人を殉教者と呼ぶのであつた。

三夜を一睡もせず故人の棺側に明かした補祭としては、亡き人を相手に話をする事も同じく易易たることで、死者の顔にかけてある金欄の聖餐覆ひの下から返事のあるのを、今か今かと待ちわびるのであつた。

「お師匠さま」と、補祭は福音書の誦唱をやめて、深夜の静寂の中で自分の眼の前に横たはつてゐる故人の方へ歩み寄りながら、そつと呼んでみるのであつた。「お起きなさいまし！ ええ？……せめてわたし一人の時だけでもお起きなさいまし！ お出来にならない、やつぱり草のやうに臥ておいでだ。」

そしてアヒルラは、數分のあひだ黙然と坐るか佇んでゐるかしたあとで、又もや單調な聲で誦唱をはじめるのであつた。

これで最後といふ第三夜のこと、アヒルラはほんの束の間うとうと居眠つたが、夜中までにあと一時間といふところで眼をさまして、誦み役を人から譲り受けると、その人の出て行つた後の扉を閉めた。

法衣をひつかけて彼は經机の傍に佇むと、死者の肩先にそつと觸れてかう言つた。――

「よろしうございますか、お師匠さま、これからわたしは最後の誦み役を勤めさせて頂きます」と前置きして、補祭はヨハネ傳を誦みはじめた。彼は最初の四章を誦み終へ、五章目にかかつたところで、とある章句にはたと釘づけにされ、ほつと溜息をつくと、大いなるその約束のことばを更めてまた繰り返した、――『死にし人、神の子の聲をきく時きたらん、今すでに來れり、而して聞く人は活くべし。』

かうして聲に出して二度くりかへすと、アヒルラは尙もこの個所を立てつづけに何度か胸の中で繰り返して、もはや先へ進まなかつた。

一たい死者の前で誦經を行ふのは大して難しい仕事ではない。ほんの少しの仕事に慣れた人なら、些かの頓着もなしにやつてのけられるものである。とはいひ條、何ごとをするのでも同じことであるが、この場合にとつても巧く行ふためには、幾つかの實地的な遣り方を守らなければならぬ。その遣り方の一つは即ち、誦み手が誦みながら死者の顔をじろじろ見ないことである。俗間の信仰にした

がへば、これは亡き人の安らぎをみだすといふ。この遣り方を無視した誦み手の告白するところでは、兩眼が不愉快に霞んで來るさうである。さうすると、深夜の獨り居には缺くことの出來ない心の平靜といふものが誦唱者を見棄てて、兩眼には先づ靜かな、あるかなきかのちらちらする影が現はれだし、初めはそれがつい近くの聖書のまはりにちらついてゐたものが、次第に遠ざかるにつれて大きくなつて、事ここに及んでは最早ぐつと自分を抑へて幻覺の出端を挫いてしまひでもしない限り、幻覺は次第に發展して敵すべからざる恐怖感を生みだすのである。

アヒルラは今はこの規則をきつぱり守らなかつたばかりか、故人の顔に金欄の聖餐覆ひのかけてあるのを残念に思つたほどであつた。とはいひながら、恐怖感に似たやうなものが補祭を困惑させたわけではなかつた。彼は上にも述べたとほり、一つ章句に釘づけになつて、こんな冥想に耽つてゐるのであつた。

『ほら、あの方は今はもう神の子の聲を聞いて、活きられたのだ。……わたしにはそのお姿こそ見えないが、あの方はちやんと此處にいらつしやるのだ。』

かうした冥想に沈んでゐた補祭は、やがて夜が過ぎて、空に一線の蒼ざめた琥珀色の條となつて曉がきらめき出したのに氣づかなかつた。それこそは、自らを生み出した大地の聲を耳に聞き且つその聲を理解してゐたサヴェーリイ法主の朽ち崩れゆく遺骸にこの地上で射す最後の曉の光だつたのである。

この曉の光をみとめた補祭は、ほつと吐息をついて經机を去つてお棺へ歩み寄り、船の兩側の壁に

肘をついて、サヴェーリーの高く盛り上つた胸が彼の胸の下になつたところで、二本の指で用心ぶかく、故人の顔にかけてある金欄の覆ひをあげて、かう話しかけた。

「お師匠さま、お師匠さま、いま、あなた様の魂はどこにあるのです？ 舌端火を吐くあのお言葉はどこにあるのです？ この智慧の足りないわたしに、あなた様の魂のせめて幾分なりとも、遺していつて下さい！」

と言ひながらアヒルラは死者の胸に縫りついたが、不意にぶると身を顛はすと、その場から飛びすさつた。何か身うちをさつと通りすぎたやうな気がしたのである。彼はぐるりを見廻した。あたりはしんと静まり返り、ただ彼の重たい眼蓋がともすれば合さらうとし、睡魔が彼をどこかへ引いて行かうとしてゐるだけであつた。

補祭はなにか振ひ落すやうに身を一振りすると、地びたへ頭を打ちつける跪拜を行つて、その音にまたぎよつとした。まるで自分の頭上で何かがはたと打ち當つた音が聞えたやうな気がして、サヴェーリーがその死せる両手に人々が持たせた福音書をささげ、顔を金欄で覆つたまま坐つてゐる姿が、ありありと見えたやうな気がした。

アヒルラは怖氣づきこそしなかつたものの、些か度を失つて、静かにお棺から後ずさりをしなから、跪いたまま上半身を起してみた。すると、こはそもいかに？ 平伏したアヒルラが身を起すにつれて、その眼にうつる死者も同じ速度でゆるやかにお棺の中で臥し倒れてゆくのである。しかも十字架と福音書をささげた両の手をそのままに、からだのうしろに支ひもしないで。

アヒルラはがばと立ち上ると、片手を振りながらかうささやいた。

「お安らかに！ どうぞお安らかに！ お騒がせして申譯ありません！」

さう言ひながら更めて福音書を取り上げて誦唱をつづけようとしたところが、意外千萬にも書物は閉ぢられてゐて、どこでやめたのか記憶がなかつた。

アヒルラは當てずつぽうに本をひらくと、かう誦み上げた、—— 『彼は世にあり、世は彼を知らざ……』

『おや、おれは何を捜してゐるんだらう？』と彼は霞がかかつたやうなぼんやりした頭で考へ、手當り次第に本の別の個所をひらいた。そこにはかういふ文句があつた。—— 『かれら己が刺したる者を見るべし。』

ところが、アヒルラがなほも頁をめくろうとした時、彼は自分の手が何とも言へぬほど重く、誰かが自分の両手を抑へてゐるのに気がついた。

『ところでおれは何を求めてゐるのだらう？ 何を一體さがし出さうとしてゐるのだらう？ どの文章だつたらうかしら？ 一たい今日は何曜日だらう』などと、アヒルラはしきりに考へをまとめようとおせつたが、何しろ心は天外に遊んでゐるので、何としてもそれが出来なかつた。

さんと光に満ちた寺院のなか、祭壇のうしろに、淡色の祝祭日用の袈裟をまとひ、高くそびえたつた紫色の僧帽をかぶつてサヴェーリーが立つて、圓味のあるふくよかな聲で、一語一語をさながらまん圓な球のやうに吐き出しながら、かう誦唱してゐた。—— 『太初に言あり、言は神と偕にあり、

言は神なりき。」

『おや、これは一體どうしたことだ？ おれはサヴェーリー師が亡くなつたやうな気がしてゐたつ

けが。さてはおれは大切な勤行に寝坊をしたわい！……聖なる朝の勤行に出そなたなつたなあ。』

アヒルラはぶるぶる顫へだすと、眼をあげてみたが、すると本當に自分が眠つてゐたこと、そして外はもう朝になつてゐることを發見した。葬式用の蠟燭の赤い火は朝日の光のなかに光芒を失ひ、室内は燈火のいきりで息ぐるしく、大氣には祈禱の時を告げる悲しげな鐘の音がただよひ、部屋の扉を誰かがけたたましく叩いてゐた。

アヒルラはあわてて手でつるりと顔を撫でると、その扉をあげた。

「眠つちまつたのかな？」と、はいつて來たベネファクトフが小聲でたづねた。

「うとうとしちまひました」と補祭は、ザハーリヤ師のあとからはいつて來た僧侶の一團に道をゆづりながら、答へた。

「ところがわしは……ほれ……あれをな。わしは一睡もしなかつたよ。わしは夜つびて棺前の辭を作つてをつたのでな」とベネファクトフは補祭にささやいた。

「でどうでした、出來ましたか？」

「いや、さつぱり駄目ぢや。」

「いいぢやありませんか。まあおきまりので御免を蒙るんですな。」

「そこで相談だが、ひよつとしてお前さん何か想はないものかな？」

「よして下さいよ、ザハーリヤ師、このわたしが學者ですかい！」

「なにをお言ひかね……ちやんと法衣を着てゐるぢやないか……立派に資格があるといふものだ。」

「資格も何もあつたものですかね、ザハーリヤ師、文才も歌ごころもないわたしが？」

「ぢやあ一つあなた、文才を授かるやうにも少し一生懸命にお祈りをして御覽なさいまし、きつと授かりますよ」と侏儒がひそひそ聲でませつ返した。

「祈れつてかい！ 駄目だよ、なあニコライシャ、お前こそわたしのために祈つてお呉れよ、わたしは餘りの悲しさに氣が變になつちまつたからなあ。わたしには現のなかでさへ妙な幻が見えるんだよ。」

「なにを仰しやいます、宜しうございますとも、わたくしが祈つて差上げませうとも」と、侏儒は答へた。

八

さて愈々古ペテリイ・ゴロド市の人々が總出で、トゥペロソフの遺骸を教會へ葬り送りをする段になつた。彌撒と葬禮は、アヒルラのお蔭で、怖ろしいほどの印象を生み出した。補祭は何か言ひ出さうとする毎に噎せ返り、言葉をときらせ、わつとばかり泣きだすのであつた。彼の嗚咽は人垣の中を響きわたつ

て、一同の胸に深い哀傷をつたへるのだつた。

やがて司祭の中の一人が述べる棺前の辭の時になつて、やつとアヒルラは悲歎を鎮め、耳を傾けながらハンカチを眼に當てて靜かに泣いてゐた。が、その代り、いよいよ彼が教會から表へ出て、永年のあひだ自分が今は聲もなく棺に納められてゐるトゥベローゾフのお伴をして歩を運んだ場所を目にするに及んで、アヒルラは思はず熱いものがこみあげて来て、しやくり上げるだけでは濟まず、且つは號泣し且つは慟哭するのであつた。胸の底からぐいぐい押し上げてくるこの號泣にはけ口を與へようと、彼は『聖なる不死者よ、われらを憐れめ』を歌ひはじめたが、その歌聲の力強さといつたら、葬列が近づいた頃を見計つてお棺を拜まうと孫たちに手を曳かれて門口に立ち出でた齡百歳にも及ぶ盲ひた老婆が、とつぜん兩手をはたと打ち合せて、跪いてかう叫んだほどであつた。――

「おお、アヒルラが天に響けとばかり張り上げる聲を、主は聞いてをられるぞ、あやんと聞いてをられるぞえ！」

かうして葬列は、號泣に取り卷かれ白楊をめぐらした安息の場所――つまり墓地に到着したが、それはトゥベローゾフが好んで夕暮の散歩をたのしみ、その手入れに少からず心を配つた場所であつた。お棺は小暗い薄板づくりの祭門の小高い盛土の蔭におろされ、最後の連禱の誦唱が濟むと、掘り起した土堆のこつちから向うへ白い亞麻布が投げ渡されて、黒々と口をひらいてゐる塚穴の上にびんと張られた。もう一秒もすれば最後の『アメン』が響いて、お棺は塚の中へおろされるのである。

ところがその前になほ、誰しも思ひ設けぬ或る出來事が起るさだめになつてゐた。といふのは他で

もない、その生涯のうちにあまたたび一同を啞然たらしめて來たアヒルラが、又しても古スケールイ・プロド市の人人を仰天させる、それも全くの新趣向で仰天させなければ矢も楯も堪らなくなつたのである。痛ましくも死人のやうに顔色蒼ざめた彼は、亞麻布の一端を支へてゐる墓掘人足の一人の方へ手を差しのべると、感動にうるんだ眼を僧侶の群の方へ向けて、かう絶叫した。――

「皆さま！ 後生です……暫時の猶豫をお命じください……わたしはちよつと一言申したいのです。」

しきりにしやくり上げてゐたザハーリヤは、あわてて墓掘人足たちを制すると、兩手を補祭の方へさしのべて、彼を祝福した。

ぐつしよりと泣き濡れたアヒルラは、木綿のハンカチでもつて、赤い斑點におほはれた額をつるりと拭くと、わなわなと唇を顫はせながら痙攣したやうに舌もつれのする聲で、『彼は世にあり、世は彼を知らざ……』と唱へたが……そこで突然、その先もう適當なことばが見つからなくなつて、補祭はさつと紫色に顔を染めると、さながら空中に彼のために描き出してある音をやつと乾いた兩眼で捜し求めでもするやうな恰好をしながら、猛烈な勢ひで『されどかれら己のが刺したる者を見るべし。』と絶叫し、それとともに一握りの土をお棺に投げかけると、急いで法衣をぬぎ棄て、そのまま墓地から出て行つてしまつた。

「立派に仰しやりましたなあ、補祭さまや！」と、侏儒は涙ながらにささやいた。

「あれはサヴェーリイの幽魂があつた男にのりうつつたのですわい」と袈裟を脱ぎ終つたザハーリヤ

は彼に答へた。

九

トウベローゾフの葬式が済むと、アヒルラにはしなければならぬ仕事が残つてゐた。一つは『他人に帯を締めて』もらふことであり、二つには、サヴェーリイの言ひ方を借りれば『死に對する生ける否定』であつた彼が愈々死ぬことである。彼はその兩方のものをすぐさま大急ぎで自分の身に近づけにかかつた。埋葬の會食の世話役も御免を蒙つて、アヒルラは玄關脇の納屋に自分の氈を敷いて横になると、そのまま起き上らなかつた。

一日、二日、三日となつたが、アヒルラは相變らず寢込んだなり、ちつとも姿を見せなかつた。トウベローゾフ師の家は、全くの死の家のやうな趣を呈した。きららかな太陽が昇つて、そのがらんとした中庭を照らしても、ひそとの生氣もない。ちぎれ雲が後から後から列をなして流れて来て、その窓硝子にうつつて、まるであの世の人の幽霊のやうな姿をあらはしても、それなり何の應へもない。このあまりの静寂を見た近隣の人々は、これでは氣味がわるくてやりきれないと苦情を言ひはじめたが、それでもやつぱり補祭は姿をあらはさない。彼の身に一たい何ことが起つたのだらうと、一同怪訝の念をいだきはじめた。

そこでザハリーヤが見舞に出掛けた。おとなしいこの老人は、長いこと部屋から部屋へと歩きまはつてゐたが、やがてかう呼んだ。――

「補祭さん、一たい何處にをるのぢやな？　なあ補祭さん！」

けれど補祭の應へはなかつた。やがての果にザハリーヤ師は、眞暗な納屋の戸を細目にあけてみた。

「ザハリーヤさん、あなたは一體何をさう大騒ぎしていらつしやるのです？」と、暗闇のどこか奥の方でアヒルラが應へた。

「何をもなにもあるものかな？　一たい今お前はどこにゐるんだな？」

「も少し戸をあけて御覽なさい。わたしはちやんとこの隅つこにをりますよ。」

ベネファクトフがそのアヒルラの言ふ通りにすると、壁に寄せかけて組み上げてある板の寢臺の上に、なるほど彼の臥てゐるのが見えた。補祭のまといつてゐるのは、小ロシヤ風に長い雑ぜ色の平打紐で結びとめた眞直ぐな折襟のついた粗織の亞麻布の肌着と、二重燃りの岩乗な麻布で製つただぶだぶな縞ズボンだけであつた。

「どうしてそんなところにゐるのかね、補祭さん？」と、ベネファクトフ師はどこに腰かけたものか席をさがしながらたづねた。

「ちよつと御免なさい、少しそちらの方へ寄りますから」とアヒルラは、壁に一ばん近い板へと寝返りを打ちながら答へた。

「一たいどうしたんだね、補祭さん？」

「いや、相變らずの補祭ですわい……」

「それは分つてをるが、一たいどうしたといふのかね？」

「深傷を負ひましたので」とアヒュラは答へた。

「なんでまた深傷なんぞを負つたのかな？」

「ザハーリヤ師、そのなんで、といふお問ひは笑止でございませうぞ。あれで深傷を負ひましたので。法主さまの御最期のため深傷を負ひましたので。」

「ふむ、仕方がないではないか？ いかにもその死といふものは……勿論その……厭はしいものぢや……生命も思想もそこではつたり停るのぢやからな……しかし避けられぬものぢや……所詮は避けられぬものぢや……」

「わたしは、そのびつたり停るといふ奴で深傷を負つたので。」

「けれどもさ、なあ補祭さん……そこでそれ……元氣を出すのぢや……いつまでもさうしてゐるのは却つて罪障といふものぢや……なぜといふに天意といふものは……決定ぢやでう……」

「つまりその決定といふ奴のお蔭でも深傷を負つたので！」

「ぢやが、どうしてさう深傷を負つた、深傷を負つたと、一つことばかり言うてをるのぢや！ それはお前、その宜しくないのう。」

「ぢや、何か宜しいものがありますので！ なんにもありやしませんや。」

「さればこそそれ、自分でも宜しいものの少いことに氣がついてをるのなら、尙のこと分別をしつ

かりせにやいかん。自然の法則といふものは免れんからのう！」

「ですがザハーリヤ師、その『自然の法則』と仰しやるのは、一たいそりやどんな代物です？ でもし、わたしがその自然の法則といふ奴のお蔭でも深傷を負つたとしたら？」

「もしさうだつたら一體お前さんはどうしようといふのかな？」

「もう澤山ですつてば！ やりきれないなあ！ お願ひですからザハーリヤ師、その法則法則つて振廻すのはいい加減にして下さい！ わたしは何もしないつもりですよ！」

「さうは言つても、まさかこのままいつまでも臥てゐるつもりぢやあるまいなあ？」

補祭はちよつと黙つてゐたが、やがてほつと溜息をつくと、小聲でかう口をきつた。――
「わたしがまだ悲しくて悲しくて堪らずにゐるのに、あなたはいきなり、そのわたしを相手にお喋りをはじめたんです。一たい何の用あつてわたしと話をしにおいでになつたのですかい？」

「一刻も早くお前が本復するやうにな、それだけの話ぢやよ。なぜといつてお前、悲嘆に沈んでをるならばをるで、せめてからだに精をつけようが爲なりと、食うたり飲んだりしようではないかな。」

「それ、そこですね、そこんところがつまり言ひたかつたんですな？ その食つたり飲んだりといふ奴をやる、それがそもその因になるんですよ！」

「そ、そりや一體どういふ意味かな？ なんの因になるのかな？」

「なんの因になるかつて、つまりその、今までのことを少しづつ段々に忘れていつて、やがてばつ

たりとあの方のことをきれいに忘れてしまふ因もとになるんですよ。」

「仕方がないではないか？」

「とは仰しやいますがね、わたしの氣象としちや、あの方のことを忘れるなんて、そんなことは断じて承知できないんで。」

「何ごともさうしたものでちやよ、なあお前さん。時がくれば忘れるのがならひちや。」

「ザハーリヤ師！ お願ひですから、わたしの前でそんなことは言はないで下さい。御存じのとほり、わたしといふ人間は、切なさが募ると何をしでかすか分りませんからねえ。」

「まだそんなことを言ひをる！ 駄目ぢやなあお前は、亂暴な眞似だけはせんやう折角自制するにとぢや。」

「ほれ、自制しろとおいでなすつた！ ところで今日び、一體誰がこのわたしの手綱をとつて呉れるんですかい？」

「望みとあらば、このわしがとつてやらうさ。」

「澤山ですよ、ザハーリヤ師！」

「そりやまたどうしてな？ 勿論のこと、とつてやらうとも！」

「澤山ですよ、お願ひですから！」

「なぜまた澤山なのかな？」

「當り前ですよ。なにも嘘をいふ必要はないんですからね。第一あなたが折角わたしの手綱をとつ

たところで、首を一寸だつて向け變へることあ出来ませんものねえ。」

「なんだと、補祭君。そりやお前なんぼなんでも鐵面皮な言ひ方ぢやぞ」と、むつとしたザハーリヤは答へた。

「いや、決して鐵面皮なわけではないですよ、だつてわたしはあなたも好きなんですからねえ。ただね、番僧のセルゲイにまで馬鹿にされてるほどの氣弱なあなたに、わたしの手綱のとれつこがないぢやありませんか。」

「馬鹿にされる！ その通りぢやとも、わしは皆から馬鹿にされとるわい！ ぢやがお前の判断の馬鹿げかたも天下無類ぢやわい！」

「ぢやそこで一つ、わたしがそんな風に判断しないやうに、手綱をとつて御覽なすつては。」

「いや、お前の手綱なんぞはとりたうもないわ、さうとも……厭なことぢや、厭なことぢや、折角かうして見舞に來てやつたわしを、馬鹿にするやうなお前ぢや。……もう會はぬぞよ！」

「ちよつと待つて、ザハーリヤ師！ わたしはなにもそんなつもりで……」

「いや、いや。そこをどけ、お蔭で切ない厭な氣持になつてしまつたわ。」

「ぢや、道をお氣をつけなすつて……」

「まつたくお前は無禮者ぢや、それも稀代の無禮者ぢやぞ。」

と棄てぜりふをしてザハーリヤは補祭を残して立ち去つたが、心のなかではひそかに、なかにそのうち臥くたびれて、自分からこの浮世へ出て來るわと、たかをくくつてゐた。ところがそれからまる

一週間たつても、アヒルラは相變らず姿を見せなかつた。

『忘れるにきまつてる』と彼は繰り返すのであつた、『奴らはみんな、あの方のことを忘れちまふにきまつてる!』この想念が頭につきまといつて離れないので、彼はこの悲嘆に油を注ぐかのやうに、猛烈な勢で沈思黙考をつづけるのであつた。

アヒルラをその洞窟から引つ張り出すには、特別な事件が必要であつた。

或る日のこと、朝の六時ごろ目を覺したアヒルラは、戸の上についてゐる狭い窓から朝日の光が納屋の中へ射し込んで来る有様を見守つてゐたが、そのとき突然ザハリーヤ師が息せききつて駈け込んで来て、僧院ではトゥベローゾフ師の後任に新たな法主が任命されたと披露に及んだ。

アヒルラは無念のあまりさつと蒼くなつた。

「だいぶ御不興のやうだが、どうしてかの?」とザハリーヤはたづねた。

「なあに、わたしの知つたことぢやありませんやね。」

「知つたことぢやないことがあるものかな? きいてびつくりするなよ、その新任の方がどんな人だかを。」

「それがわたしに何かかかはりがあるんですかい?」

「神學校を出た方ぢやぞ!」

「なあんだ、神學校を出た方ぢやですか! それがそんなに嬉しいんですかい! 駄目々々、あなたはまだ俗つぽいや、ねえザハリーヤ師。」

「どこが『俗つぽい』のぢや? 神學校を出られたといへば、——つまり智者といふわけぢや。」

「そらまた、智者とおいでなすつた! まあ智者なら智者でいいさ、そのためあなたやわたしまでが利口になるんですかい?」

「なにを言ふのぢや、——といふとお前は、學識ある僧を敬はぬのかな?」

「わたしが敬ふにせよ敬はぬにせよ、その人にとつちや同じことぢやありませんかな? その人にとつちや損も得もないわけだし、わたしとしちや、そのひまにもつと大切なことが考へられるでせうからねえ。」

「といふと何だね、一つ聞いておかうではないか、何を考へようといふのかね?」

「昨日のことをですよ。」

「またひとを馬鹿にする氣か!」

「なにも馬鹿になんかしやしませんよ。あなたはあなたで、新しい人を迎へようとなさる、わたしはわたしで——舊い人を忘れまいとする。これのどこが無禮だと仰しやるんですかね?」

「いや、もうこれ以上お前とは問答無用ぢや」とザハリーヤはきつぱり言ひ切ると、不満の念をいだいて出て行つたが、一方アヒルラは即座に起き出て、顔を洗ふと、一さんに町長のところへ駈けつけた。それは自分の家と一對の駿馬をなるべく早く賣拂ひたいから御助力を乞ふ、と依頼しに行つたのである。

「賣つてどうするんだね?」とポロホンツェフはたづねた。

「まあさう聞きたがりなさるなよ」とアヒルラは答へた、「出来たあとになりや、すつかり分るんだから。」

「どんな筋合のことだか、それくらゐは言つてもよかる。」

「筋合ですかい、つまりサヴェーリイ師のことをみんながあつさり忘れちまはないやうに、これがその粗筋でさあ。」

「そんならザハーリヤ師に頼んで、説教の中へなるべく度々あの人のことを織り込んで貰へばよかる。」

「ザハーリヤ師がやつて呉れるもんですか？ 駄目でさあ、あの先生は昨今ちや學問といふものに惚れこんぢまつてゐるが、わたしは……わたしは相變らずの昔氣質で、人間といふものが好きなんです。」

かうして交渉は終を告げ、アヒルラの財産は彼の希望どほりに賣り拂はれてしまつた。

かうなつたらもう、彼が今や何をしてくるかを見するのほかはないわけである。

補祭は彼の全財産と引き換へに金二百ルーブル也を手にした。この二枚のお札を南京木綿の袈裟下のポケットに押し込むと、これから縣市へ行つてくると宣言した。彼は既に細い横梁から旅人用の棍棒を削り上げてゐたし、また小さな包もちやんとくくつてあつたが、その上に市場へ行つて玉葱入りの大きな揚菓子を二つ買ふと、それを例のお金の入れてあるポケットに押し込んで、今や長途の旅へと進發する用意全く成つたところへ、突然例の新任の法主イロデオン・グラツイアンスキイが到着

した。これは中々の美男子で、その年齢はちよつと見當がつかなかつた。その外見を以て判ずるところ、二十六歳と値ぶみしてもよし四十歳と値ぶみしてもよし、いづれとも軍配を上げ兼ねるのであつた。

アヒルラはこの新しい僧院長の前へ進んで、その祝福を頂いた上で、相手の手に接吻しようとしたところが、相手がその手を振りもぎつて、ぐつと打融けて接吻しようとする唇をさし出したので、アヒルラはその通り接吻した。

「そら御覽、なんていい人だらう！」と、それから一時間して、補祭の歸宅を見送りながら、ザハーリヤがさう言つた。

「一たいあの人のどこをつかまへて、さう手つ取り早くいい人だなんて折紙をつけられるのですね、ザハーリヤ師？」と、うつかりアヒルラは答へた。

「分らんのかな？ あの方は、お前に手の接吻をゆるさずに、口の接吻をされたではないか……これが何よりの證據ぢや。」

「けれどわたしに言はせりや、あれは中身の無い勿體ぶりに過ぎませんなあ」とアヒルラは答へた。今や彼は、新しい法主がサヴェーリイの後を襲つたことに對して猛烈な嫉妬の情を示して、何とかして彼の悪いところを残らず見附け出して、とても亡くなつたトゥベローゾフの足もとにも寄りつけない人物だと論證しようとかかつてゐた。新任の法主が古シムライ・ゴド市の住民一同の人氣を博すれば博するほど、アヒルラは益々猛烈に彼を憎まうとするのであつた。

その翌日、新任の法主は彌撒を修して、一場の説教を行つたが、その中で彼はその前任者のことを言葉をつくして褒めちぎつて、この人の功績を追想し尊崇するのは我等が是非とも爲さねばならぬ義務であると述べた。

アヒルラとザハーリヤはこの説教を祭壇の中で、入口の幕に耳を押し當てながら傾聴してゐた。アヒルラにとつて心外でならなかつたのは、新任の法主が前の法主に劣らず辯舌にめぐまれ、會衆一同がトゥベローゾフの説教の時にさらさら劣らぬ熱心さを以て彼の言葉に耳を傾け、……おまけにもう一つ、彼がトゥベローゾフを擁護して、その功績を尊崇し追想せよと垂訓することであつた。

「餘計な真似をするもんだ、餘計な真似をするもんだ」と、ザハーリヤと一緒に會堂を出ながら、補祭はしきりに憤慨した。

彼としては、新しい法主の成功を見るにつけ聞くにつけ憎くて憎くてならず、まるで嫉妬ぶかい女のやうにこの法主に瞋恚の炎を燃やすのであつた。彼とても自分が公平を缺いてゐることは氣づかぬでもなかつたが、さりとて自分を制御することがいつか出来ず、やがてザハーリヤが彼の頭の頭上に冷水三斗を浴びせてやらうと、グラツイアンスキイといふ人物はその言動のどこをつかまへてみて

も有徳の仁ではないかと言ひ出すと、アヒルラはじれつたさにその手にしてゐた杖を両手で折つべしよつて、かう言ひ放つたものである。――

「つまりそこんところが、わたしとしては胸くそが悪いんで！」

「それは妙だのう、するとあの人がもつと悪い人だつた方が増しぢやとでもいふのかな？」

「そりや増しですとも、増しですとも……勿論のこと、増しですとも！」と、アヒルラはじれつたさうに遮つた。「一たいあなたは知らんのですかい、罪を犯さざる者は悔ゆることもなし、つてことを！」

ザハーリヤは辟易して、片手を振つただけだつた。

アヒルラの縣市遠征は、一日のばしに延期を重ねた。といふのは補祭が祭服や書物や教會用金の檢證に立會つたからであつたが、それも黙りこくつてぶんぶんしながらで、一體何にさう腹を立ててゐるのかに至つては凡夫の知り得るところではなかつた。不幸にして彼には突つかかつてゆく對象がなかつたのだが、そこへ持つてきてグラツイアンスキイが、是非ともトゥベローゾフの塚の上にささやかな記念碑を建てなければいかん、と言ひ出したものである。

アヒルラは待つてましたとばかり蹶起した。

「あの方のため『ささやかな』記念碑をと仰じやるのは、そもどうしたわけでござすかな？ あの方は永の年月をこの土地に住まれた上に、ほかの誰びとも及びもつかないやうな功績をのこされたんですわ。」

グラツイアンスキイはじろりと不興氣にアヒュラを見やつたが、そのまま彼には答へずに、サヴェーリイ記念碑の建立費を募集しようと提議した。

應募金は三十二ルーブルあつた。

補祭は一文も應募する氣になれず、きつぱりと釀金を斷つた。

「なぜかな？　なぜ厭なのかな？」とベネファクトフがたづねた。

「あの俗っぽいところが厭なんです」とアヒュラは答へた。

「一體どこが俗っぽいと言はれるのぢやな？」と、グラツイアンスキイは素氣ない調子で言葉を挿んだ。

「だつて、あれほどの人物の記念碑を山内惣出で建てるのに、たつた三十二ルーブリとは情ないぢやありませんか？　そんな記念碑は三文出して買ったピストルも同然でさあ。いんや、あの方の名を汚すやうな仕事の片棒かつぐのは御免を蒙りますわい、わたしは寄進は見合せますわい。」

その夕方ザハーリヤ師は、恆例の散歩に出た序でアヒュラのところに寄つて、かう言つた。――

「なああ補祭さんや、氣をつけるがよいぞ……お前は故意と法主どのの反感をそそつてをるやうな節があるからう。」

「何ですつて？……ちえつ！　お願いだからそんな奥歯に物のはさまつたやうな言ひ方はよして下さいよ。一體どうしたといふんです、このわたしがどうしてあの人の反感をそそつたといふんです？」

「敬意を失してをる、敬意を失してをる、從順を缺いてをる、ここぢやよ。記念碑のことに不承知を唱へて、お手に接吻もせずに出て行つたではないか。」

「だつてあの人は、わたしに手に接吻されるのはお嫌ひぢやないですか？」

「内輪の場合はさうかも知れん、ぢやが公の場所となれば話は別ぢや。……さうとも、全然はなしは別ぢやわい。……」

「いやはや！　あなたのその新法主談義を聞いてゐると、頭がこんぐらかつて、何が何やら分らなくなつちまひますぜ！　今かう言つたかと思へば今度はああおいでなさるんでねえ。これぢや一生涯かかつたつてとてもあなたの御託は一々覺え切れるもんぢやない、わたしはいつそ一つ規則を馬鹿正直に守つてゆきませうよ。」

補祭は新任の法主の前へ出て、縣市へ行くため二週間の暇を願ひ出ると、無理やりにその手に接吻して、かう言つた。――

「失禮の段は平に御容赦。但しかうでもして置かん限り、わたしには何が何やら分らなくなりますんで。」

かうしてアヒュラはやつと自由の身になり、旅路につくことが出来たが、思へばその旅は、彼が願つるもつて遠大なる目的を抱いて、今日こそは明日こそはと準備をさをさ怠りなかりし旅なのであつた。といふのは他でもない――彼は例の納屋に籠つてゐた頃はやくも、衆人に魁けてトゥペローソフ記念碑のことに考へついたので、それも三十二ルーブリなどといふけちなぢやなく、自分の有金のこ

らすなげうつて、つまり一生涯の勤勞の結晶である自分の全財産を賣拂つて得た二百ルーブリでもつて、建てようといふのであつた。アヒルラとしては、これだけの金があれば、以て一世を衆人を驚倒するに足る記念碑を建立するに充分なつもりであつたのである。しかもその記念碑の雄大と加減ときたら、その理想案はさしも大きな彼の頭の中にもはいりきらなかつたほどである。

一一

十月の夜は寒々として陰氣だつた。雲はせはしげに空を馳せ交ひ、風は路ばたの柳の裸枝を鳴らしつゝ、それにもめげずアヒルラは小止みもなしに夜道をつづけてゐたが、やがて秋のしのめが漸く白みかける頃には、既に道の半ばに達して、心おきなく一息いれることが出来たのである。

彼は道ばたに風の吹き寄せた大きな藁の堆のあつたのを幸ひ、その陰に身を寄せて風を避け、裾をすつぽり頭からかぶつて、ぐつすり寝入つた。

その日は明けはなれてからも、前夜に劣らぬ凄じさであつた。冷たい太陽は、いま雲間を出てばつと輝いたかと思ふと、すぐさままた雨雲にさへぎられてしまふ。風は今うおつと吼えたけつたかと思ふと、すぐまた颯々と地上を這ひまはる。補祭が折角あたまからすつぽりかぶつてゐた裾は、とうの昔に頭からもぎとられて風のまにまに翻つてゐる始末だつたし、太陽は折々雲間から躍り出て、古武

士の風格を帯びた彼の顔に眞向から照りつけるのであつたが、補祭は相も變らぬ高いびきだつた。そのうちに日も大分中天に近づいてすつかりぼかぼかして来て、アヒルラが藁堆の中へ頭をつつ込んで臥てゐる收穫も濟んで踏み荒された畠には、死に絶えた畠の住み手のうちで殿りをつとめる連中が、ぼつぽつ現れはじめた。アヒルラの長靴の上には硬い黒い甲をした天牛が這ひあがるし、また彼の髯には半ば感じの痺れてゐる山蜂がぶるぶる顫へながらよたよたと這ひのぼつて行つた。可哀さうなこの蜂は、補祭の濃い髯の中に温みと隠れ家を見出して、やつとうごめき始めた途端に補祭の目を覺させてしまつた。アヒルラはけたたましく鼻を鳴らすと、ううんと伸びをして、威勢よく跳ね起きて、包みを肩へ投げかけ、ちよつと旅籠に寄つて一文出してクヴァスを一杯引つけて、またてくてく歩きただした。

黄昏れかける頃までに彼は残る九里を踏破して、縣市の寺々の十字架が目にはいると、道ばたの溝の土を盛り上げた上に坐りこんで、出立以來はじめて物を食ふ氣になつた。彼は一週間ごしの揚菓子やポケットから出すと、下の皮を合せて一緒に重ねて、格別の食慾をもつてばくつきはじめたが、それでもすつかり平げられず、食へ残しをまたポケットに押し込むと、愈々縣市にはいつた。彼は知合つた神學校の生徒のところ泊つたが、翌る朝は早くからトゥガーノフの家を訪れて、自分の來たことを取次ぐやうに命じ、玄關の長椅子に陣どつた。

一時間たち二時間たつたが、アヒルラは奥へ呼ばれなかつた。彼は一再ならず、傍を駈け抜けるコサック人の召使にかう尋ねた。――

「おい小僧！ 一體どうしたんだ。いつになつたら通して呉れるんだ？」
けれど召使は、埃まみれの南京木綿の袷袢を一着に及んだ百姓然とした補祭に、ろくろく返事もしなかつた。

昨日の強行軍の疲れをゆつくり醫すひまもなかつたアヒルは、ついうとうとしかけたが、この際居睡りなどしてゐる場合でないと思ひ返して、昨日食ひのこしの揚菓子のかけらのあるのを幸ひ、口でも動かして氣をまぎらさうと考へた。ところが袷袢下から菓子の残りを取り出して、くつついてゐる塵を吹かうとしたとき、突然びつくりしたやうに居すくむと、蜂に刺されでもしたやうにぱつと席を立つて、取次ぎも待たずに勝手知らぬ豪華な部屋々々を奥へ奥へと突き進んで行つた。偶然にも彼はまつすぐ貴族團長の書齋にぶつかつて、彼と面とつき合せると大音聲でかう叫んだ。――
「皆さん！ 神様を信じる人は、わたしに御助力ください！ 御覽ください、このわたしの不仕合せを！」

「一體どうしたといふのかな？」とトゥガーノフは呆れて訊いた。

「バルメン・セミョーメイチ！ 不心得千萬にも、わたしはとんだことをしでかしたんで！」と、恐怖のあまり吾を失つたアヒルは號泣した。

「どうしたんだ、人殺しでもしたのかい？」

「いや、わたしはあなたの御助言を頂かうと思つて、徒歩で駈けて來たんです。二百ルーブリで法主の記念碑を建てたいと思つたものですから。」

「で、どうしたのかね？ それとも金を取られたのかね？」

「いや、取られたのぢやありません、もつと悪いんで。」

「ぢや失くしたのかな？」

「いや、食つちまつたんで！」

さう言つてアヒルはトゥガーノフの眼の前に、食ひかけの揚菓子の裏を差し上げたが、成程そこには百ルーブリ紙幣の無事に残つた片隅が焼きついたやうにくつついてゐた。

トゥガーノフはその薄い爪でそのきれはしに觸つて、菓子の裏からそれを剝がしてみると、その下にはもう一枚の同じやうな断片が、もつとべつたり貼りついてからからに乾からびてゐた。

貴族團長は思はず噴き出してしまつた。

「そらね、御覽のとほりすつかり食つちまつたんで」と補祭は、途方に暮れて中指の爪を噛みながら断定して、突然くるりと向きを變へるとかう言つた、「では、お邪魔をして濟みませんでした、さやうなら！」

トゥガーノフは助け舟を出した。

「まあまあ、さう思ひ詰めたものぢやないさ」と彼は言つた。「こんなことは何でもありませんよ。お前さんの札はわしが銀行で換へて貰ふとして、お前さんにはわしのとこの札を上げようぢやないか。それでサヴェーリイ和尚の記念碑を建てるがよいさ、わしもあの人は好きぢやつた。」

と言ひながら彼はアヒルに手の切れさうな百ルーブリ紙幣を二枚わたし、例の食ひ残しは家藏の

骨董に加へるためその手に納めたのである。

この災難はこれで収まつたが、そこで次の災難がはじまつた。建てたいと思ふ通りの記念碑を設計しなければならぬのだが、それがアヒュラには何ともまともがつかないものであつた。彼はこの災難をもトゥガーノフに打明けて、その意見を求めた。

「わたしはね、バルメン・セミョーヌイチ」と彼は言つた、「その記念碑をわたしの金のゆるす限り、がつちりした宏大なものにしたいんで。」

「ピラミッドを花崗岩で造らせるがよからうて。」

トゥガーノフは本棚から書類綴りを一つ出させ、その中からエジプトのピラミッドの繪を取出すと、かう言つた。

「つまりかういつた鹽梅のピラミッドをな！」

この案はとてもアヒュラの氣に入つたが、さてそれを實行するとなると果して金が足りるかどうかを危ぶみ出した。それに答へてトゥガーノフは、もし二百ルーブリで足りなかつたら、足りない分はそつくり自分が、トゥベローゾフ老人に對する尊敬のしるしに出すつもりだと言つて呉れた。

「ちやがお前さんは」と彼は言つた、「その碑の建立者になつて、どうなりと好きなやうにお前の考へ通りに建てるがよい。」

「さうまでして頂いちゃあ……」と、途方に暮れたアヒュラは言ひかけたが、その先をつづける代りに床べたにひれ伏すと、いきなりトゥガーノフの手をつかんで、それに接吻した。

トゥガーノフは感動した。そしてアヒュラを『善いお百姓』と呼ぶと、自分の邸の中二階を宿にするがいいと申し出た。

補祭はすぐさま神學校の生徒の合宿から貴族團長の邸うちに引越して来て、石の注文に奔走しはじめた。彼はまづ何よりも極度に慎重にやらうと努力した。

「一體どうしたわけだらうかなあ？」と彼は獨りごつのであつた。「おれの赴くところ、まるで判で捺したみたいにごたごたがついて廻るんだからなあ。」

そして彼は神様に、せめて今度だけなりと、一生に一度だけなりと、われを夢中になる癖より免れしめたまへ、このたび發願の大事を全く眞剣に成就せしめたまへ、と祈るのであつた。

一一

補祭は縣市で名のある記念碑師をしらみつぶしに廻つてみて、とどのつまり一番ぱつとしない男に白羽の矢を立てた。それはポプイギンとかいふ名のロシア人の挽白師であつた。ドイツ人の記念碑師は二人までも、そんな大きなピラミッドを建てて、一體『寸法が許しますかな』としつこく問題にして、おまけにその幅をあつさり歩數で測つたり、高さを手の上げ下げで測つたりして、すつかり補祭を憤慨させてしまつた。

挽白師のポプイギンは萬事呑込みが手つ取り早かつた。彼等二人は歩數と斜尺とでもつてすつかり寸法を測定し、互ひに言葉でも申合せを遂げ、じゃんしゃんと手打ちをして、ピラミッドはめでたく注文とほり、工事が進められていつた。アヒルラは仕事の進み工合を見物したり、巨きな石を轉がしたり切つたりする手傳ひをしたりしながら、その大きさ加減に頗る満悦の體だつた。

「寸法なんてものはなくても、この方がよつぽどいいわい」と彼は言ふのだつた、「こちらは好きなやうに建てるのさ。」

ロシアの職人ポプイギンはこの説を支持するのだつた。

トゥガーノフは進行状態を報告するアヒルラの言葉に耳を傾け、口論ひとつせず、異論も一切たてなかつた。彼はさながら赤ん坊を玩具であやすやうに、この大男を記念碑でもつてあやしてゐたのである。

一週間すると記念碑もその碑銘もすつかり出来あがつたので、補祭はトゥガーノフのところへやつて来て、彼の創造的空想の妙なる産物を一目見て呉れるやうに頼んだ。それは途徹もなくだつた。廣い、上から押しひしやげたやうなピラミッドで、頂上には十字架が立ち、四隅には金泥をほどこした大きな天童の木像が立つてゐた。

トゥガーノフは記念碑を篤と檢分して、『生氣躍動しとる』と言つた。補祭ときたらただもうたわいもなく恍惚としてゐた。そこでピラミッドは分解され、分解したまま九臺の櫓に載せて古市へ運んだ。殿りの十臺目の櫓には當のアヒルラが陣どつて、薙にくるまれた金泥塗りの天童の木像四體

の間に脂じみた皮衣を纏つてうづくまつてゐた。彼は記念碑の豪勢な出来榮えに有頂天だつたが、その有頂天な氣分のどこかでは些か不安な氣持もするのであつた。つまり彼としては、自分の智慧のありたけ、趣味のかぎり、はたまた亡くなつたサヴェーリイに對する歸依と愛情を傾けたところの貴い作品であるこのピラミッドを、誰かが悪評しはしまいかとそれが心配だつたのである。さうした悪評家の目を避けるため、アヒルラはこの豪華な碑の建立を、できるだけ祕密にやつてしまはうと決心し、古市に着くと、夜更けにザハリヤ一人だけのところへ顔を出して、今度のピラミッドを造り上げるまでの苦心の一部始終を物語つた。

ところが祕密のうちに碑を組立てようといふアヒルラの目論見は巧くゆかなかつた。分解されて櫓に載つてあるサヴェーリイ記念碑の部分々は、早くもその翌朝には全町の人々の注目の的になつてしまつたのである。忽ち人垣を築いた町の人々が特に興味を抱いたのは、薙の間からきらきら光つてゐる金泥の天童の腕や翼だつた。その素朴な人々は、この天童の材料は何だらう、銀か、それとも金メッキかといふ問題を、口角泡を飛ばして議論するのだつたが、結局いづれとも決し兼ねた。

「銀の上に金を被せたんだよ、おまけに胎中にはダイヤモンドが嵌めてあるんだ」とアヒルラは説明しながら、ピラミッドの組立人夫のぐるりに雲集した町民たちをしきりに押し戻すのであつた。

町民の中で上流に屬する連中にもアヒルラはほとほと手を焼いた。この連中は、まるでわざと悪評しようといふ下心を抱いてやつて来たやうに、彼には思へるのであつた。

「まつたくあの連中ときたら、どだのお話にも何にもなりませんわい！ 何から何まで、頭から尻

尾の先まで、わるい事づくめだ。やれやれ情ない次第だ！一體ひとをこんな辛い目にあはせて済むものかい？ よしんばお前さん方の氣に入らないにせよ、よしんば出来榮えがよくないにせよ——辛抱するがいい、黙つてるがいい、こつちの身にもなつてみるがいい……これでも、さんざ苦勞したんだからなあ。……ちえつ！ なんて汚はしい奴等だ——世間の奴等は！」

そして別に自惚屋でもなければ名聞慾にとつつかれてもゐないアヒルラも、しよつちゆう癩癩を起しつづけの擧句に、もうとても我慢がならないまでになつてしまつた。彼は事トッペローゾフに關するかぎり、片言隻句も平氣では聞けなかつた。故人に對する稱讚の言葉までが彼を激昂させるのだつた。そんなことは言つて呉れない方がましだと思ふのである。

「何を褒めることが要るんです！」と彼はベネファクトフに言ふのだつた。「ねえ、ザハリヤ師、あなたがどうだらうと勿論あなたの勝手ですがね、何ぼ何でもあなたは淺はかですよ。あなたがうちの法主さんのことを思ひ出す有様を見てゐると、まるで牝牛の通つた跡の乳でも嗅いでゐるみたいですぜ。」

「わしが法主のことを悪く言つたとしてもいふのかな？」

「いや、全體あの人のことは何にも言ふことは要らんです。今どきは、信仰の強い人々のことで彼これ議論するやうな、そんな時代ぢやないんですぜ。」

「お前さんといふ人は何て始末のわるい檢閲官ぢやらう！ ぢや、あの人のことを褒めてもいかにののかの？」

「何を褒めることが要るんです？ まさかジプシイの馬ぢやあるまいし、褒めそやしたつて始らんですわ。」

「お前さんの言ふことは本當に全く支離滅裂ぢや」とザハリヤは言つた、「以前のお前さんはもつとずんと良かつたものぢやがのう。」

ほかの相手になるとアヒルラは、ベネファクトフに對するよりもつと遠慮なくびしびしやつつけるものだから、世間の人たちはアヒルラの癩癩に怖氣をふるつて、彼を避けて廻るやうになつたので、彼は卒然として或る一つの考へに逢着してしまつた。その考へといふのは、地上の一切を空しと見て、死をおもふ心であつた。

「あなたはどう言はれるか知りませんがね」と彼は分別するのだつた、「いきなり死病にとつつかれて死んでしまふといふことも、徒らごとではありませんわい。さうしてまるつきり違ふ場所へ行つちまふんだが、それが何處かといふことは萬事神様の胸三寸にあることだねえ。」

「いや、お前さんはそんなことを考へるのはまだ早いよ、まだまだ急には死につこはないわ」と、ザハリヤは彼を慰めた。

「でもザハリヤ師、あなたはどうして先の事が分るんです？」

「お前さんのその立派な體格を見なさい……それに耳だつてその通り……しつかりしてゐるしさ。」
「そりや體格や耳のたしかさから云や、木槌か何かで叩き殺されでもしないかぎりはなかなかくたばらんことぐらゐ自分でも分つてますがね、けれど……この邊のことは例のそれ、空想次第でしてね、

だから人間はこのことを考へなけりやならんのですわい。」

といった次第で、到頭しまひに補祭は正銘の重いヒポコンデリーにかかつてしまった。世間の人もこの症状に気がついて、補祭どんはわざわざ死を招き寄せようとしてゐるなどと取沙汰しはじめた。

一體法主の家は遺言によつて校舎として寄附されることになつてゐたのを、その時の來るまで補祭が巢を營んでしきりに哲學をこね廻してゐる次第だったが、その家の玄關脇の小部屋はこの頃から、或る連中にとつては親身の籠つたまた物見だかい注目の對象となり、別の連中にとつては神祕な畏怖をそそる場所となつてしまった。

司祭長のグラツイアンスキイは一ぺん補祭を見舞に來て、自分勝手に世捨人になるのは怪しからん、こんな風に世間を遠ざかるのは思慮のある行ひとは言へないときめつけると、アヒルラは平然としてかう答へたものである。――

「思慮のある人を捜すならもう手後れですわい。その人は埋葬が済んぢまひましたからねえ。」

醫師のゴフキンは、いづぞや補祭に一泡吹かされたことのある男だつたが、依然として彼と友人關係をつづけてゐて、今度も友情に驅られて彼を慰めにやつて來て、君は病氣だから治療しなけりやならんと斷言すると、アヒルラはかう言ひ放つた。――

「なるほど、いかにも君の言ふとほりさ。何しろ僕は色んな考へが頭の中でわんわん言つてゐて、まるつきりぼかんとしてるんだからなあ。……いろいろと思案してみるんだが――それがどうも一向とりとめがないし、結局何から何まで一切合切が……寄つてたかつて僕を……いちめつけるんだ（ア

ヒルラはそこで顔をしかめると、ひそひそ聲でかう結んだ――）鬱ぎの蟲さ！」

「さうとも、君はひどく神経が昂ぶつてゐるからなあ。」

「え、何て言つたんだい？」

「ひどく神経が昂ぶつてるんだよ。」

「そ、その神経つて奴さ！ しよつちゆう頭が壓しつけられるみたいに重いし、胸の中はまるで棒杭でもつつ立つてるみたいにぎりぎり痛むし、夜なかに坐つてゐる時なんぞは、一體何が悲しくつて泣いてゐるのやら、いつまで経つてもわけが分らんのだよ。」

トゥベローゾフの教の上の娘である地主の夫人セルポローヴァも見舞にやつて來た。アヒルラは彼女をみると喜色をうかべた。見舞客はかうたづねた。――

「一體どうして病氣になんぞなつたんですの、ねえ補祭さん？ 一體どうなすつたんですの？」

「實はね、奥さん、わたしはつい神経が昂ぶつちまつたんでして。何しろ法主さまが亡くなられてからといふもの、明けても暮れても鬱ぎの蟲にとつつかれて泣いてばかりゐるものですから。」

「あなたは情の激しいかたですからねえ、補祭さん」と奥さんは答へた。

「左様で……胸がかう壓しつけられるみたいで二六時ちゆう、もうこのうへ生きてゆく甲斐もないやうな氣がしましてね。」

「生きる甲斐がないなんて、そんなことをどこでお覺えになつたの？」

「實はその、倦怠と憂悶と悲哀と、この三人姉妹がやつて來ましてね、わたしにすっかり教へて呉

れましたんで。では御機嫌よう、奥さま、わざわざ見舞ひくだされて有難う存じまする。」

さう言つて補祭はほかの見舞客の時と同様に彼女を門口まで見送つて出ると、またもや今言つた『三人姉妹』と昂ぶつた神経だけを相手に、ぼつねんと獨り居に返るのであつた。

ところがそこへ意外の事件が勃發して、アヒルラを跳び上らせたのである。その事件といふのは侏儒のニコライ・アファナーシエヴィチの死去であつたが、彼は末期に際して自分の葬式はザハリヤ師とアヒルラに營んで貰ふやうに遺言し、そのお禮としてそれぞれ五ルーブリづつと、自分の編み上げた靴下二足づつ、それにもう一つ木綿編みの夜帽を一つづつ残していつたのである。侏儒の葬式から歸る途々、補祭は浮々と陽氣に見えるどころか、さんざんに巫山戯ちらすのであつた。

「まづかう御覽なされ、みなさま、いよいよ死の女神さまがわれらの仲間を片つ端から呼び集めにかかりましたわい」と彼は言ふのだつた、「これでもうニコライ・アファナーシエヴィチも亡くなりましたなあ。お次は追つつけわたしやザハリヤ師の番になりませうて。」

このアヒルラの豫想は間違つてゐなかつた。彼がその女神のお迎へを待ち設けてゐる一方では、慈悲深く且つ待つたの利かぬこの女神は、既に彼の肩のうしろに佇んで、その冷たい翼でもつて彼の身を半ば蔽つてゐたのである。

扱てこの年代記も、いよいよ勇士アヒルラの最後の事蹟を丹念に保存しなければならぬ段になつた。——その事蹟たるやまことに彼にふさはしいもので、且つまたそのお蔭で彼は、彼獨特の趣向を

以て浮世の海の彼岸へ渡ることが出来た次第である。

一三

そろそろ春も近づいたので、古^{スクリュー・イ・ゴロド}市は次第に活氣づいて來た。川は氷をひらかうとして、青みわたり、もりあがつてきた。その兩岸には穀物のつまつた俵の山が次第に高くなつていつて、だだつ廣い舢の手入れもはじまつた。

冬のおひだひもじい思ひをしてきた近在の村々から、毎日のやうに、襪をまとひ木皮のわらちを穿き、繊維で編んだ白い大黒帽をかぶつた百姓の群が、町をめざしてやつて來た。彼等は年貢と穀物といふ二つの不如意に責めたてられ、われがちに曳舟人夫を志願して、さて採用になつて遠い遙かな土地へ穀物を浮き流しする役目になりつくと、それがほかならぬ吾家で足りなくて難澁してゐる穀物だといふことも知らぬげに、頗るもつて幸福を感じるのであつた。しかも、この幸福にしたところで、みんながみんなありつけるわけではなく、勞働力の供給はその需要をはるかに上廻つてゐたのである。かうした過剰な連中の心配をしてやらうといふ篤志家は誰ひとりゐなかつた。備はれた連中となると問題は別で、これにはちやんと世話する人があつた。彼等は附添人つきではじめて食ひ物に近づくことが許され、その附添人は、長いおひだ空腹をかかへてゐた連中が適度に腹をふくらしたのを見

ると、すぐさま鍋のところから追ひ立てるのであつた。長いことひもじい思ひをした連中に動けなくなるほど食はせることは、禁物なのである。かういつた所謂『がつがつ連中』は腹八分目はおろか十分目といふことも知らず、『消化消化れて腹が空くまで待つ』などと暢氣なことも言つてはをれず、食ひ過ぎが基で死んでゆく。つい近頃も、オカから出て来た兄弟同士の脊の高い若い衆がやはり御多分に漏れぬ腹ぺこの『がつがつ連中』で、それが粥の鍋の前に互ひに對坐してゐたところが、急に二人ともころりと引つくり返ると、そのまま死んでしまつた。醫者が屍體を解剖して、胃の中に毒物の有無をさがしてみたが、見出したものは、粥だけであつた。破裂しさうなまでに張りひろがつた胃の腑が粥でぎつしり詰つてゐたのみか、食道にもぎつしり粥が詰り、口の中にも、喉頭にも、この兄弟の食つた粥が、べた一面にはりついてゐた。この悲惨な死の責任は、『がつがつ連中』であるこの兄弟を適時に鍋から追つ立てることを怠つた附添人に歸せられたのである。かうした不注意が甚しいため、別の或る組合でも同じ日の晝食のとき、更に二人の男が眞蒼になつて悶絶した始末だつた。この二人が命だけは取りとめたのは、既にかうした光景を目にしたことのある經驗家が偶然その場に居合せたからだつた。その食ひすぎた二人はすぐさま着物を脱がせ丸裸にして、かつかと熱した鍋の前に腹を出して置いた。その曳舟人夫の中から湯氣がぼつぼと立つのを仲間は見物したが、かうしてその二人は命を助かつて、またぞろ食ひ足しに出掛けたのである。

すべてかうした場面は、穀穀のついてゐる穀物にお目にかかつたことのあるほどの人なら誰でも知つてゐる。ところがそんな出来事と並んで、もう一つ別の場面も演じられてゐたが、尤も、これもか

なり世間に知れ渡つてゐる場面で、パンのない連中の演じるものに過ぎないのである。ほかでもない、それは夜更けて、人通りの絶えてしんとした町の往來に、いきなりこれといふ謂はれもなしに、通り魔が現れたしたのである。かうした突拍子もない通り魔の一人のごときは、角も爪も生やしてゐるといふ紛れもない地獄じみた姿をしてゐて、百姓婆さんを二人に、酔つばらつた鍛冶屋を一人、もう一人これは素面の役場の書記が商人の娘と夜更けの逢引をしにゆくところを捕まへて、きれいに剃いで丸裸にしてしまつた。丸裸にされた連中の斷言するところによると、彼等が毒牙にかかつたその魔物にはちやんと牛の角が生えてをり、そのみか曳舟人夫が解に積荷をするとき俵を引つかける鐵鈎によく似た爪までが生えてゐたさうである。そこで夕焼けが消えるが早いか町ぢゆう誰一人として出歩く者がなくなつたが、それでも魔物は相變らさうろつてゐた。鹽の倉庫の番兵と監獄の番兵が、その姿を何べんか見掛けたのである。その魔物が何ともはや圖太い奴で、射程内へぐんぐんはいつて番兵のつい鼻先まで来ると、哀れつばい聲を出してパン皮を恵んで下さいと言つたといふ。そこで夜間の巡邏が派遣されたところが、その中の一人——それはわれわれには久しい前からお馴染の勇士ポロホンツエフ自身の指揮下にある男だつたが、これが、本當にその魔物とばつたり行合つて、誰何までしたものの、向ふが『味方だ』と返事をすると急に怖氣がついて、後も見ずに逃げ出してしまつた。ここに至つて老騎兵大尉はすつかり警察の不甲斐なさに愛想をつかして、例のボヴェルドーヴニヤ大尉に向つて、町内を騒がすこの魔物の捕縛といふ一刻もゆるがせにすべからざる喫緊事に、その麾下の廢兵隊の協力を請うた。ところが廢兵隊長は、何しろ事が魔物を相手どつての仕事であるため

その上官の特別許可が下りないので、仕事にかかるわけにもいかずまごまごしてゐるひまに、魔物の方では遠慮會釋もなく横行して、遂にこの町を完全な恐慌状態に追ひ込んでしまつた。これを見て司祭長のグラツイアンスキイまでが乗り出して来て、町民に向つて迷信について一場の演説を試み、頭布や外套を剥ぐやうな悪魔は斷じてゐる筈がない、夜ごとに徘徊する魔物といふのは勿論のこと悪魔ではなくて、こんな工合に悪魔の装束をして愚民を威しつけた方が追剥をするのに便利なのに味をしめた何處かのぐうたらなごろつきに違ひない、云々と斷定をくだした。するとこの法主は猛烈な怨嗟の的になつてしまつた。これを見た分離派の祈禱所の唱歌隊長は、奇貨おくべからずとして、これこそ、新教會の異端の歴然たる證據であると説いたので、勞せずして僧院の信徒の中の小羊を若干、まんまと自派の方へ宗旨がへさせてしまつた。それだけではない、悪魔はグラツイアンスキイに否定された腹癒せを、もつと別の方法を以ても亦行つたのである。すなはち、その説教のあつた日の翌日、法主の家の玄關の天井に泥靴の痕のついてゐるのが發見されたのだつた。言ふまでもなく、これには一同仰天して、すつかり怯え上つてしまつた。一たい足を上に向けて天井を歩けるのは何者であらうか。悪魔を措いてそんな真似の出来る者はないと忽ち衆議一決に及んで、法主はわが細君のこの信念をひるがへさせることすらも出来兼ねた始末であつた。彼の訓戒などは宙にけし飛んでしまつて、今や大膽きはまるこの魔物は完全なる尊敬を享けることとはなつた。誰一人としてこの魔物の御機嫌を損じようと敢て企てる者はなく、誰一人として従つてまた、黄昏れてから往來へ出る者もなかつた。ところが、魔物がここでつい度を過してそのためひどく歩を悪くしてしまつたのである。何しろさ

うなつては、往來ではもうさつぱり甘い汁が吸へなくなつてしまつたので、今度は方向を變へて、例のピラミッドの下にサヴェーリイ師が葬られてゐる他ならぬその墓地の、銅の十字架だの聖像だの神燈だのを、續々として搔つばらひだしたものである。

町の人々は久しくもう魔物の色んな悪戯におどしつけられてゐるので、今度の聖物竊取にしたところで、矢張り彼の敵意ある悪ふざけに違ひないと、別に深くも考へずきめてしまつた。

この盜難の跡を檢視した人々は、そこいらの墓の荒されてゐるのと同じく、サヴェーリイ記念碑も被害を受けてゐるのを見た。ピラミッドの天邊に立つてゐる十字架と金泥塗りの頂部とは、こつぴどく揉みくたにされて、ぐらぐらになつてゐたが、それでも心棒がしつかり留めてあつたので兎に角くつついてゐた。その代り金塗りの天童の一體はもぎとられて、あはれむさんにも手斧で叩き割られた擧句に、なんら市場的價值のないがらくた扱ひで、相手にされずに抛り出されてあつた。

この報を受けたアヒルは、その荒された記念碑を檢分して、かう言つた。――
「よおし、よしんばお前が魔王自身であらうとも、こりやもう只では捨て置けんぞ。」

それにつづく夜の十時すぎ、補祭は誰にも一言も告げずにこつそり家を出ると、そろそろと墓地を

めざした。彼は長い竿と丈夫な亞麻の投繩を手にしてゐた。

誰にも行合はず、誰の目にもかからず、アヒルラは十一時少し過ぎにはめざす墓地に達した。彼は門を一瞥した。門扉はとぎされて、かすかにことりことりと鳴つてゐるのは、爽かな春風に揺られてゐるのである。悪魔はつきりこの門から出入するのではなく、彼には彼でどこか別に大道があるものと見える。

アヒルラは横手へ廻つて、墓地をめぐるしてゐる濠に一杯詰つてゐる脆い雪を竿で試つてみた。竿はうつすら張つてゐる氷の上皮を貫いて、すぶととほり、忽ち半分ほどはいつてしまつた。濠割の深さはざつと六尺ほどで、この濠割の向う側には、凍てついたつるの粘土の盛土が連つてゐた。

アヒルラは竿をぐいと差し込むと、それに全身の重みを托して、蛇のやうにするりと身を躍らせて、濠の向う側へ跳び越した。この空中渡過をアヒルラは無事にやり了せたが、その巨人的跳躍の支へになつた竿は彼の圖體の重みに堪へ兼ねて、補祭の脚が峠の上にひよいと立つたその瞬間に、ぽきんと折れてしまつた。アヒルラはそんなことには目も呉れなかつた。歸りにまた跳び越える時に同様のお役に立つて呉れる代物は、墓地の中で何とか見附かると思つたからである。それにまた、彼は突然そのとき、夜更けの墓地で人間が捉へられがちの、あの感情に襲はれたのだつた。べつに恐怖といつたほどのものでもないが、兎に角魂がなんとなく嚴かに迫つて、五感が鋭く射とほすやうにびんと張るあれである。アヒルラはふうと一つ大きく息を吸ひ込むと、黒羅紗の大黒頭布をぬぎ、白髪の捲毛をひと振りしてから、月がその白銀の光をもつて『神の御島』をひたひたと浸してゐる有様を、さも満

足さうに見渡した。彼の胸は妙に佗しくなると同時に意氣軒昂ともしてきた。彼は自分の過ぎし日の向ふ見すにも漸く老年の訪れたことを思ひ浮べて、月を振り仰ぐと、戯れにこんな挨拶を送つた。――

『御機嫌よう、コサツクのお日様！』

静寂と、永遠の眠りと、まことに安息の場所である！ ところがそのとき、まるで溜息のやうに、

何かどさりと物音がした。……いや、早まつてはいけない、それは雪が沈下れた音にすぎなかつた。アヒルラは、黒ずんだ雪が一面にまるで曲つたり波だつたりするやうに見える有様に、眼を凝らしてじめた。しかしそれは眼の迷ひであつた。それは、月の夜空に小さな綿雲が舞めき合ひながら漂つてゐて、それが地上にちらちらと影を落すのにすぎなかつた。補祭はまつすぐにサヴェーリーの塚までやつて來ると、天童の一つに背をもたせながら、墓の上に坐り込んだ。静寂をみだすひそとの氣配もなく、ただ影のみが相も變らず走り去り來つて、いつ果つべしとも見えなかつた。

補祭はうつらうつらしはじめた。彼は更にしつかりとピラミッドにもたれかかつて、とろとろと睡りに落ちたが、それも長くは續かなかつた。とつぜん何者かがづしりと足音をさせたやうな氣がしたのである。アヒルラは眼をあけた。物みなはひつそりと静もつて、ただ空模様が変わつてゐるだけだつた。月はおぼろに霞んで、サヴェーリーの灰色のピラミッドの上には唯一つ長々と幅のひろい影が這つてゐた。曇りかけて、朝の匂ひがしてゐた。アヒルラは立ちあがつたが、するとその瞬間、またしても彼には、誰か墓地を歩いてゐるやうな氣がした。

補祭はピラミッドを一廻りしてみた。誰もゐない。

なんだかつい今しがた付いたやうな足跡があるやうな氣もするが、雪がすっかりぐちやぐちやになつてゐて、踏むごとに殆ど形をなさぬ穴があくやうになつてしまつてゐる今となつては、新しい足跡を昨日のそれと見分けることなどは固より思ひも寄らないのである。町の方で一番雞が鳴いた。いや、てつきり今日は悪魔がおいでにならぬと見える。……

アヒルラはそのそと、さつき跳び越えて墓地へはいつた場所へとつて返した。何の苦もなく、彼はその抜け穴をさがし當てて、濠につつ立つてゐる長い竿にひよいと何氣なく手を掛けたが、そこではつとして、自分の持つて來た竿は先刻折れてしまつた筈だが……と思ひ返した。すると一體このちやんとした竿はどこから出現したのだらう？ 『をかしいぞ！』と補祭は思つて、なほも眼を凝らし、その竿が幻でも何でもなく、本當に濠からにゆつと突き出てゐることを確めると、すんでのことにそれに縋つてひらりと身を躍らさうとした途端に、巨きな爪を生やして黒い毛のもじやもじやしてゐる大きな手が二本、後の肩ごしにむんすとはかり胸にかかつた。

すはこそ悪魔！

一五

アヒルラは素早く兩膝を折つて屈み込み、かうした身のこなしでもつて自分の上にのしかかつて來

た悪魔の下に身を沈めると、その両手をぐいと掴みぎま力まかせに引きしぼつたので、悪魔の顎はぐさりと音高く補祭の脳天にぶつかつて、そのままびつたりへばりついてしまつた。そんな始末にならうとは夢にも思ひかけなかつた悪魔は、必死に身をもがいたが、間もなくいくら頑張つても所詮は無駄だとさすると、急におとなしくなつて、うんと呻くと補祭の背中にぶらさがつてしまつた。彼はその身を振りもぎることが出来なかつたのみか、なにしろ顎がまるで搾木にでもかかつたみたいにあヒルラの脳天に締めつけられてゐるものだから、一言半句も發することができなかつた。そこで悪魔のできる動作といつたら足をばたつかせることだけだつたが、その代り流石は魔物だけあつて、この足だけはすぐ老獪に使ひこなしたのである。

アヒルラはさながら丈夫なお百姓が豌豆の束を持ち運ぶやうに軽々と悪魔を背負つて、墓地の方へ五六歩あともどりすると、助走をつけてひらりと濠を跳び越したが、拔目のない悪魔はこの際どい瞬間をとらへて、ちやうど二人が濠の上に差しかかつたそのとき、宙に浮いた補祭の兩脚に自分の兩脚をからみつけた。不意にからみつかれたアヒルラは平均を失つて、その背負つてゐる荷物もろともぼしやりとばかり、氷まじりの濠のぐしやぐしやの中へ墜落してしまつた。

五臟六腑にしみわたる冷たさに、彼はすんでのことと手をゆるめて悪魔をはなさうとしたが、ぐいと齒をくひしばつて耐へると、ほかにこの危急を脱する手立てもがなと搜しはじめた。ところが無念や、そんな手立ては見あたらなひのだつた。滑らかな濠岸は一面に氷をかぶつてゐて、それを攀ぢ登るのは兩手を使はなければとても出来ない相談だつたし、さりとて兩手を空けることは即ち悪魔をの

がすことに他ならない。アヒルラはその氣にはなれなかつた。彼は大聲をあげてみたが、その結果は誰にも聞えなかつたか、それとも誰かその聲を耳にした人はあつても、『また誰か悪魔に引つ剝がれるな』とばかり、ますます首をちぢめ込んだに過ぎなかつた。

補祭は、この分では、浮足たつてゐる住民たちからは何の應援も期待できないことを覺つたが、さりとて悪魔は手ばなせず、彼と一緒に濠水のなかでぶるぶる顫へてゐた。二人とも寒さからだが硬ばつてしまひ、もし偶然の手によつて救ひ出されなかつたら、二人ながらに敢ない最期を遂げたかも知れないのである。

その朝はやく、町の波止場をめざして、精穀を積んだ荷櫃の列が蜿蜒と連つた。墓地の傍を通る道にさしかかつたとき、百姓たちは濠の中に何だか妙な群像のあるのに氣がついて車をとめたが、それが人間の青い顔で、しかもその上には、後ろから角の生えた悪魔の面がにゅーつと出てゐるのを見てとると、わつとばかり傍へ飛びすさつた。凍え死にさうなアヒルラは、満身の力を振りしぼつて百姓を呼びとめると、悪魔の見張りをするやうに命じ、自分は片手を濠から出して十字を切つて見せた。

「おおい皆の衆、こりやキリスト教徒だぞう！」と百姓たちは口々に叫ぶと、悪魔もろとも補祭を濠から引つぱり上げて、一つの樽の底溝に藁を詰め込み、硬ばつてゐるアヒルラをそれに寄つかからせ、悪魔の方は車の前部へ抛り上げて、町へはいつて行つた。

ちよつとアルコールを引つかけると、補祭はぶると身ぶるひをして、櫃の滑り臺に轉げ伏してしまつた。彼の有様ときたらとても見てはをられなかつた。まるで藥罐のやうに全身ぬれ鼠で青んぶく

れて、顫へのため今にも息が絶えさうであつた。悪魔はといふと青葉が凍つたみたいにへたばつたきりであつた。さてこんな工合にくだんの妖怪を町まで運んでくると、補祭は町役場の前で停めると合圖をした。

ここでアヒルラは悪魔を櫃からおろすと、事務室へ運び込むやうに命じ、町長を迎へにやつてから、門衛に頼んで乾いたシャツと兵隊外套を貸して貰ふと、着替へをして安樂椅子に足をのばした。

まだ朝まだきだといふのに、町は早くも意外のニュースを入れて湧き返り、巖に打ち寄せる海のやうな群衆が、ぎつしりと役場のまはりに詰めかけてゐたが、ほかならぬその一郭にある官舎に、騎兵大尉ポロホンツェフは住んでゐたのである。群衆は喚聲をあげながら、どつとばかり玄關へなだれ込んだが、それは天童を打ち割つた悪魔を見、且つはまた悪魔の生捕りといふ前人未踏の偉勳をたてた補祭を見ようとしてであつた。その群衆を掻きわけて、その官位の高さや偉さにも拘らず、やつこのことで通り抜けて來たこの町の名士顯官の面々は、司祭長グラツイアンスキイ、ザハーリヤ師、ボヴェルドーヴニヤ大尉といった顔觸れであつたが、彼等が萬里の波濤を乗り越えてやつて來られたのはただ單に、群衆が悪魔の裁判に當つては坊さんの立會ひが宗教上せひとも必要であると認めたから、他ならず、またボヴェルドーヴニヤ大尉は、劍欄でもつて右に左に勇敢に平手打ちを喰はせながら、そのお蔭でやつこのことで人波を掻き分けることが出來たのである。

この將校は今この場合やはりこの席にとつて非常に必要な人物で、而もその勇猛果敢さまでが必須の條件であつたといふのは、この町が今や將に暴動の起きる形勢にあつたからである。

下の方では、尋常一様ならぬ現れを秘めた家を取り巻いて群衆が湧き立ち波だつてゐる一方、その家の中でもそれに劣らぬ騒動が演ぜられてゐた。町長、すなはちポロホンツェフ騎兵大尉は、寢室用の綾織木綿のズボンにフランネルのジャケツといふ珍ないでたちで事務室にとび込むなり、ばつとその眼にうつつたのは、いかさま角を生やし爪を伸ばした悪魔が床べたにまんまるに丸まつてをり、その向ひの請願人用の安樂椅子には、兵隊外套を着込んだ上に更に山羊皮の毛皮外套を二枚もひつかけた巨大な塊が、横になつてぶるぶる顫へてゐる光景であつた。それが補祭だつたのである。

悪魔の上には、思ひ思ひの姿勢をした古スケルライ・ゴロド市の貴顯がのこらず顔を揃へてゐたが、その面上には、悪鬼の近くにゐる恐怖の色が些かも見られなかつた。まつたく怖がることは全然いらないのである。この悪魔が一種かうみじめな代物で、寒さにわなわな身を顫はせながら、いつぞや全く使ひ物にならぬのでアヒルラ補祭が萬屋のダニールカに進呈した古い氈の袖無外套の七つさがりどころか九つさがりも疾うに通り越したおんぼろを、どうにかかうにか引つ被いでゐることは、誰の眼にも一見して明かだつたからである。その同じ袖無外套を引つかぶつてゐる悪魔の頭には、薄ぎたない紐で無様にぞんざいに結へつけた牛の角が二本つつ立つてをり、またどこからか引つちぎつて來たらしい羊の皮

の切端を巻きつけた両手には、俵を揚げるのに使ふありきたりの鐵鉤がにゆつと突き出てゐた。なかんづく振るつてゐたのは、一人の兵隊が悪魔の懷中へ手を差し入れて、そこから紐のついた古い銅製の十字架を引つ張りだしたところ、それには押し文字で、『ねがはくは神よみがへり給ひて、怨敵の退散せむことを』といふ銘がはいつてゐたことである。

「だからわたしは、こいつは食はせ者だと言つたではありませんか」と、司祭長のグラツイアンスキイが言つた。

「左様、左様。服装はいかさま悪魔ですが、この姿を見るとさつぱり悪魔ではありませんわい」とザハーリヤは相槌を打つと、すぐさまこの謎の一件の方へびよいと近寄つて、かう問ひ糺しはじめた、「ねえお前さん、お前さんは一體誰だね？ ええ？ わたしの言ふことが聞えるかね？……いい子だからさ！……ええ？ 聞えるかい？……言つてご覽……。さもないと答をくはせるよ！……言つてご覽！」とザハーリヤはしきりに疊みかけた。

そこで町長が入れ代つて進み出て、親しく悪魔の訊問にかかつたが、これも同じく驗がなかつた。

そろそろ身體が温もつて意識をとり戻しはじめた悪魔は、靜かに寢返りを打つただけで、まるで龜の子のやうに、外套の中に首を押し込んでしまつた。

扱てこの悪魔を如何に處分したものかといふことに就て、色んな口から思ひ思ひの意見が出た。町長は、彼を現在このままの姿で縣知事のもとに送り届けるがよいといふ意見で、その根據とするとこ

ろは怪物異形取締法であつた。ところが一同の好奇心は轟々としてこの決定に反対を唱へ、即刻この場で悪鬼の正體をあらはし、以て一般公衆の燃えるが如きいらだたい好奇心を満足させることが必要不可欠なる所以を町長に説きつけようと、ありとあらゆる理由を案出するのであつた。

その論争に加はらないのはただ二人の人物だけであつた。それは町會長とザハリーヤ師だつたが、彼等兩人が論争の仲間入りをしなかつたのは別に理由のあるわけではなく、ただ特別の穿鑿にいそがしかつたのである。すなはちちんくりんな肥つちよの商人である町會長は、或はこつち側から或は向う側から、ひつきりなしに忍び足で悪魔の傍へすり寄つては、及び腰で十字を切ると、すぐさまばつと傍へ飛びすさるのだつたが、それは悪魔の巻ぞへをくつて自分までがこの世から消えてなくなつては大變だからであり、一方ザハリーヤはといふと、悪魔の角を引つ張つては、外套の下へかうささやき込むのであつた。

「ねえ、お聞き、よくお聞き。わたしにこれだけでいいから言つてお呉れ、法主さんの邸の天井を足を逆さにして歩いたのは、あれはお前さんかね？ 白狀したら管で打つのはやめるよ。」

「わつちで」と、悪魔は鈍い聲でうなつた。

この悪魔がはじめて發した言葉は、一座のあひだに思ひ設けぬ恐慌を惹起せしめたが、その恐慌はちやうどそれと時を同じうして彼等の耳に傳つて來た戸外の群衆の荒々しい絶叫によつて、益々募つたのである。もはや我慢のならなくなつた群衆は、上へ押し登つて來て、悪魔を今すぐここへ出せと口々に要求し、おまけに、警察は悪魔から袖の下をせしめて彼を又もとの地獄へ放してやるつもりだ

らうと、歴々たる疑念を大聲で表明したものである。群衆の中には、いつそ一思ひに役所の扉を叩き割つて、力づくで悪魔を法権の手から奪り返せなどと直言を發する連中もあつた。しかも、かうした威し文句には、殆どすぐさまその實行が伴つたのである。——即ち早くも扉をがんがん叩く音がしたのだ。しかも騎兵大尉は忽ち一手を案じて區警察署長にめくばせすると、こつちは即座に消防用ホースを引つ張り出して來て、その先つぽをかかへ込んで扉の上に登ると、猛烈な勢で迸る水を群衆にそそぎかけた。これを合圖に、一場の愉快な場面がはじまつた。人群は一瞬間さつと後へひくと、きやつきやつと陽氣な叫びや口笛や笑ひ聲を立てたが、次の瞬間には、この上機嫌になつた人々はみんな急に深刻な顔になつて、唇を噛みしめ、どつと前へ押し出した。冷水浴などにはもはや誰一人としてたじろがず、扉はみりみりつと音を立てる、窓からは石が飛び込む、扉の上の先生は足をつかまへて引きずり下され、ホースの先を奪はれて、長官の面前で水をぶつかけられるといふ始末になつた。町長をはじめ居合せた貴顯紳士は、奥まつた部屋々々へわれがちに逃げ込んで扉の錠をしつかりおろしたが、逃げ後れたボヴェルドーヴニヤ大尉は事務室を駆け廻りながら、かう呶鳴るのであつた。

「諸君！ 平氣ですぞ！……ひるむことはないですぞ！……われわれには神様がついてをられるです！……武器のある人は……避難されるがよい！」

さう言ひながら、事務室の戸棚が開け放しになつてゐるのが目につくと、彼はすばやくその中へ跳び込んで、戸をぱたりと閉めた。その間にも粉みじんになつた窓からは益々猛烈に石が室内に落下して、さしもの悪魔も思はず恐怖と絶望の悲鳴をあげたほどであつた。

まさに天下分け目の一瞬間とはなつた。それは英雄を待望し、果然その英雄は出現に及んだのである。一同がその存在を忘れてゐたアヒルラの引つかぶつてゐた毛皮外套が、むくむくと動きだし、はらりと床へ落ちると、窮屈なつんつるてんの兵隊シャツを着込んだ跣のアヒルラその人が、つい先刻までは悪魔みたいに見えて、それが因で公々然たる正銘の一揆の様相を帯びた大騒動がもちあがつたところの怪人物正體を、みづからあばき出したのである。

「着物を脱げ！」と補祭は命令した、「着物を脱いで、さつさと正體をあらはしちまへ。ぐづぐづしやがると、生き皮ぐるみそつくり剥いちまふぞ。」

さういひながら彼は、まめな百姓女房が、丸茹での雛つ子の羽をむしるやうに、悪魔の毛をさつさとむしりはじめた。

一瞬ののちには——悪魔の姿は掻き消すやうに消え失せて、啞然たる補祭の前へ轉がり出たのは、硬直した町人ダニールカであつた。

アヒルラは彼を窓ぎはまで抱へて行くと、碎けた窓枠から首を出して、かう呼ばはつた。——

「静かにしろ、この馬鹿どもが！ こりやあダニールカが悪魔のこしらへをしたんだぞ！ よく見

るがいい、この通りだ。」

と補祭は、青いダニールカの顔を自分の前にもちあげて、それと同時に彼の扮装を片つ端から一つまた一つと往來へ抛り出しながら、大音聲で、

「そうら奴の爪だぞ！ そうら奴の角だぞ！ そいから、そうらこれが奴の衣裳だぞ！ そこでわしの言ふことを篤と承るがいい、これから訊問をはじめるからな。」

そこで、ダニールカの首を自分の方へ向け變へると、補祭は心底からの作り物ならぬ親切な調子で、彼にかうたづねた。——

「なんだつてお前は、この馬鹿めが、こんなあさましいなりをしたんだ？」

「ひもじさのあまりで」と町人はささやいた。

アヒルラはこの答辯を即刻群衆に傳へると、間髪をいれずそれに續けて、持前の方圖のない聲で天に響けとばかり、——

「さあ、これでよし。正教の信者がたは退散されるがよいぞ。さもないと桑原々々、長官どのがいざ決心をされたなら、即座に發砲の下知がくだるんだぞ。」

群衆は陽氣な笑ひごゑを立てながら、思ひ思ひに散りはじめた。

長官どのは果然『決心』をして、のこのこと這ひ出てくると、早速善後の處置にとりかかった。すぶ濡れで息も絶え絶えのダニールカを乾いた囚人用服に着がへをさせると、眞剣になつて訊問を開始した。その白状するところによると、彼はみんなから見棄てられ、その放埒のところがみんなから追つ立てられ、飢ゑと寒さのあまり、諸所方々をあてもなくうろつき廻つてゐるうちに、とど悪魔に身をやつすといふ手を案じ出し、かくて夜毎に人々を威かして手當り次第に追剥ぎを働き、それをユダヤ人に賣り拂つては露命をつないでゐたといふのである。アヒルラはこの一部始終を熱心に聴いてゐた。訊問がすんでも、彼は依然としてダニールカを見つめてゐたが、そのうちにこれは一體どうしたわけだか分らないが、ふとそのダニールカの姿が自分の眼のなかで昇りつ降りつするのに氣がつきはじめた。ばちばちと激しく瞬きをしてみると、又しても別のものが見えはじめた。ダニールカは今度は、烈々たる金色になつたり、眞白な銀色になつたり、さうかと思ふと眼が痛くて見てはゐられぬほどに炎々と燃え立つたり、さてはまたふつと掻き消すやうにゐなくなるのだつたが、しかも本當の彼はちやんと其處にゐるのであつた。かうしたまるで萬華鏡を覗いてみるやうな千變萬化を一々眼で追つてゐるのは、とても苦痛で我慢がならなかつたが、さりとて眼をつぶると、益々色どりは目ま

ぐるしく、層一層ちかちかと眼にしみてくるのだつた。

『ええい、こりや一たい何事だ!』と補祭は思つて、片手で顔を撫でてみると、自分の手の平が顔の皮膚の上を動いてゆきながら、まるで羅紗でフランネルの面を撫でるやうに、擦音を發しながら引つかかるのに氣がついた。と突然、前後不覺の一瞬が来て、血脈の中をすばやく火の流れが焼け通つたかと思ふと、頭のとつぺんへ突き當り、そのまま意識は朦朧となつてしまつた。補祭はどうして自分がここに居るのやら、又どうしてこのダニールカが羽をひん筆られた雛つ子みたいな姿でつ立つてゐて、自分が人々を威した次第や、人々から手當り次第に何でもかでも剥ぎとつた次第や、とどのつまり思ひもかけず補祭さまのお手に落ちた次第を、べらべら喋り立ててゐるのやら、その邊のことを忘れ果ててしまつた。

「ちや、これを言つて御覽」と、又してもザハリヤが彼に訊ねた、「なあお前、司祭長どののお宅の天井を倒さ足で歩き廻つたのは、あれはどうしてやつたのだな?」

「お茶の子でさあ、あんなこと」と、ダニールカは答へた、「わつちは長靴をぬいでね、そいつを竿の先に穿かしてね、それでもつて天井に足跡をつけたんでさあ。」

「さあもう其奴を放してやつて下され、そいだけいぢめれば澤山でせう」と、アヒルラは眼をばちばちさせながら、藪から棒にそんなことを言ひ出した。

一同は呆れて彼の方を振り返つた。
「何を言ひなさる? 聖物を掠めとつた者を放すなどといふことが、どうして出来ますかのか?」グ

ラツイアンスキイは彼を制した。

「聖物を掠めとるなんて、そんな仰々しいことぢやないでさあ。ひもじさのあまりやつたことです。ほんたうに放してやりなさいつてば！ 家へ歸らしておやりなさい。」

グラツイアンスキイはアヒルラの方を見向きもせず、彼の辯護は處を得たものではないと言ひ放つた。

「なぜですかね……貧乏な者が、ひもじさのあまりやつたことすぞ……使徒でさへ階級を悦ばし
たぢやありませんか……」

「愈々もつて怪しからんことを言ふ！」と、法主は儼然として振り返つた、「あんたはそもそも社
會主義者か？」

「へえ、どうして『社會主義者』なんてことになるんですかね！ わたしの言つてるのはね、聖なる使徒たちが麥晶を通るとき、穂を摘んで食つた、といふことなんですぜ。あんたがたは根が都育ちの司祭の子供なんだから、下世話のことは勿論御存じあるまいが、こちとら寺男の小倅は、學校にゐた頃よく食ひ物を盗んだものでさあ。いや、後生だから、其奴を放してやつて下さい、さもなけりや、わたしはどつちみち、此奴をあんたがたの手に渡しやしませんぜ。」

「どうした、氣でも違つたのか？ わしの前でよくもそんな大それたことを……」

ところがアヒルラは、この最後の文句がよつぽど肝に障つたと見え、忽ち満面に紫を注ぐかと思つと、びしよぬれの自分の袈裟下を引つかつぐが早い、かう唝鳴り立てた。――

「よし、ぢやあ此奴は渡さん、斷じて渡さん！ 此奴はおれの俘だ、煮ようと焼かうとおれの勝手だ。」

さう言ひ棄てざま、補祭はよろよろつとダニールカの傍へ歩み寄ると、彼を扉口の外へ突きとばし、誰にもダニールカの後を追はせないやうに扉口の兩の柱にむんと両手をかけて、まだ何か言はうとしたけれど、忽ち自分がぐんぐんと上へ伸び、むくむくと横へ廣がり、焰々と炎を發して、そのまま消えてゆくやうな氣がした。彼は東の間はつと兩眼をとぢたが、その瞬間に意識を失つて、どうとばかり地上に倒れてしまつた。

アヒルラの状態は、熱病が人に與へて呉れるあの甘美な忘却状態であつた。補祭の耳には、『亂暴』とか『調書』とか『卒中』とかいふ言葉がきれぎれに聞え、また誰かが自分のからだに觸つたり、自分のからだを轉がしたり持ち上げたりするのが感じられた。どたばたと人々の駈け廻る音や、往來でまた捕まつてしまつたダニールカがくどくどと涙聲で赦しを乞ふ聲も聞えたが、彼はそれら一切を夢の幕ごしに聞く思ひで、自分は又しても何處か涯しもない無限の彼方へぐんぐんと伸びむくむくとひろがつて、何ともいへぬいい氣持に燃えさかり、火むらだつ熱病の中に燃え盡きようとするのであつた。いよいよあれだ、生の終りだ、死だ。

アヒルラの行状については早速然るべき調書が作成された。そこに記載される文言に關しては、古くからの同僚であり、『古い憲兵士官』であるヴォーイン・ポロホンツェフが、何とかして補祭の仕業をできるだけ罪の軽い穩かなものに仕立てようと、長いことさまさまに頭をしぼり術策を弄したけ

れど、にも拘らず出来上つた調書の表題は結局、『古^{スケールイ、イロド}市警察當局ノ目通りニ於テ僧院ノ補祭あひら・ですにーつんガ働キタル不遜ナル亂暴沙汰ノ件』となつてしまつた。

ポロホンツェフ大尉の骨折りで、この『不遜ナル』といふ字だけは消されたけれど、アヒルラの『亂暴沙汰』の方は本件の眼目となつて、それに對して晚かれ早かれ嚴かな判決が下ることになつたのである。

一九

アヒルラはさうしたことは露知らず、病院のベッドの上に身を横たへて、わが身の熱病の猛火のなかで心靜かに穩かに燃えさかつてゐた。補祭の入院を引受けた醫師は、これは人事不省と大熱とから直接に惹起されたチフスであつて、かかるチフスに遭遇した場合は醫者の義務として、最も悲しい豫言をしなければならぬと宣告した。

ポロホンツェフ大尉は早速この言葉尻をおさへて、では、アヒルラの例の所業は既にこの病症が始つてゐたせゐると看做すべきではあるまいかと、醫師の意見を徴した。醫師は言下にその通りですと答へた。アヒルラはもうこれで五日目だといふのに依然無意識のまままで寝てゐて、相變らずもやもやした、しかし快いさまさまの觀念のうちに漂ひ、相變らずひつきりなしに身も心もとろけんばかりの甘

い熱氣にひたりつづけてゐた。彼の前には使ひ古しの床几にザハリーヤ師が腰かけて、冷水にぬらし たタオルを病人の頭に當てがつてゐた。夕方になるとそこへ、數名の知合ひと醫師がはいつて來た。補祭は眼をつぶつてはゐたが、その耳には醫師がこんな風に言つてゐるのが聞えた。その醫師の言葉といふのは、病人の靈魂のことに關與しようと思まれる方は、今度病人が正氣に返つたらその機をのがさぬやうに願ひたい、それといふのは今や危篤状態が迫つてをり、その先のことについては全然明るい豫想をすることが不可能であるから、といふのであつた。

「どうぞその機をのがさぬやうに願ひます」と彼は言ふのであつた、「何しろ脈搏がもうすつかり絶望ですから。」さう言ふと醫師は、ポロホンツェフやその他の人々と話をはじめたが、この連中としてはアヒルラの見舞にやつて來たのはいいが、扱てその當人が死なうとしてゐる、しかも風邪がもとで死なうとしてゐるといふことが、何としても腑に落ち兼ねるのであつた！ この雲つくばかりの大入道が死ぬといふのに、一緒に寒氣凜冽たる水浴をしたダニールカの方は、牢屋の中で平氣でびんぴんしてゐるのである。醫師は這般の消息について、アヒルラは久しい以前からひどく興奮して常態を失つてゐたのだ、と説明した。

「左様、左様、いかに左様、あなたのお言葉にありましたつけな……これの神経が昂進してゐるとな」とザハリーヤは舌をもつらせた。

「不思議な病氣ですわい」とポロホンツェフが口を挿んだ、「何から何まで變つた病氣ですわい！ わしはこの年まで生きて來たが、こんな病氣はつひぞ聞いたことがありませんわい。」

「左様、左様、左様……」とザハーリヤは相槌を打つて、「人間の習俗が洗煉されてくると、病氣までが複雑になるものと見えますな。」

補祭はそつと眼をあけて、かうささやいた。

「飲むものが欲しい！」

彼は銀か何かの杯を當てがはれると、燃えるやうな唇をそれにくつつけて、苔桃の汁をごくごくと喉を鳴らして飲みながら、眞赤に充血した眼で一同を見廻した。

「どうしたね、うちの大事なオルガン先生、ちつとはいいいかね？」と、町會長が親身のこもつた調子できいた。

「すつかりむくんぢまひましたわい」と補祭は苦しげに答へると、ちよつと間をおいてから全く藪から棒に、まるで昔話をするやうな口調で話しはじめた。「わたしの飼つてゐたあの『お名前は』といふ犬ところが死んだあとで、……つまりあの小つぼけなからだをして可哀さうに車に轢かれちまつたあとでね、……また犬ところが一匹買ひたくなつたもんです。……ペテルブルグのネフスキイ通りで、犬屋を見掛けたのでね、……かうわしは言つたんです、——ひとつ可愛い小犬を……貫ひたいたがね、とね。……ところが犬屋の言ふことにや、今日び犬があるもんですかね、みんなポインターやセッターになつちまひましたでね、とかうなんで。そこで、そりや一體どんな獣かね、つて聞き返すと、なあに犬つころと同じものでね、ただ名前がちがふだけでさあ、といふ返事でしたつけ。」

補祭はそこで口をつぐんだ。

「どういふつもりであなたは今の話をなすつたんですか？」と醫師は、無遠慮な元氣のある聲で病人にたづねた。アヒュラが謔言を言つてゐるのだと思つたのである。

「あなたがたが今しがた新しい病氣のことを論じてゐたからでさ。病氣といふものはみんな……よしや名前はどうかであらうとも、めざすところはただ一つ、——死ぬといふことですからねえ……」

さう言つたなり補祭は又しても意識を失つて夜半まで昏々と眠つてゐたが、やがて突然こんな謔言を言つた。——

「鐵砲打、鐵砲打……あつちい往け、鐵砲打め！」

この最後の言葉を發するとともに、彼は跳ね起きて、すつかり正氣に返つて寢臺の上に坐つた。

「補祭や、懺悔をしなさい」と、ザハーリヤが小聲で言つた。

「さうだ、しなけりや」と、アヒュラは言つた。「早く受けて下さい、——懺悔を致します、何一つ忘れないやうに、——どなたにも悪いことばかりしました、キリストのためにお宥し下さいまし。」

——さう言ふと、一つ溜息をついて附け加へた、「早く法主様を迎へにやつて下さい。」

グラツイアンスキイは待つ間ほどなく姿を現した。アヒュラは遠くから目顔で司祭長に挨拶をすると、その祝福を請うたのち、二度重ねてその手に接吻した。

「死んでゆきますでな」と彼は言つた、「どうぞわたしを赦して下さいまし。赦して下さい、罪ぶ

かいわたしを。」

「神はそなたを赦されませんが、そなたもわたしを赦して下さい」とグラツイアンスキイは答へた。

「わたしは別に誰にも悪い氣持を抱いたわけではないので……ただ、わたしといふ人間は、理窟ちや割りきれんところがあるんで……」

「なんでさう含蓄はつきむことがあるものかな……。あなたには立派な心情こころがあるのでう……」

「いや、さうまで仰しやつて下すつては……痛み入ります」と補祭はあわてて遮つて、「いつもの見當はづれなことばかりして來ました……その中でも先日は……記念碑のことで向つ腹を立てたりして。……思へばつまらん妄想でした。いつしかは地も空も焼け落ちて、ものみなは滅び失せるんです。なんの記念碑がいりませう！ ただただわしの考へが至らなかつたのです！」

「あれはもう智慧を得たわい！」と、うなだれながらザハーリヤがぼつんと言つた。補祭は寢床の上でうらんと身をねぢつた。

「キリストのためにわたしをお赦し下され」と彼は急いで言葉をつづけた、「この上むりに此處におとどまりなさいませんやうに、わたしはまた熱が出て來ましたでな。……さやうなら！」

學者の法主は死に行く者に祝福をあたへ、ザハーリヤは辭し去るグラツイアンスキイを見送りに立つたが、やがて戻つて來て鬨をまたぐと、あまりの凄じさに棒立ちになつてしまつた。

アヒルラは今や斷末魔の苦しみの最中で、しかもその苦悶は怖しいといふよりは、むしろ人の心を打つものであつた。彼は何秒かのあひだ靜かに臥てゐるかと思ふと、空氣を吸ひ溜めて置いてから、

ウ・ウ・ウ・フ！ といふ音を長くのばして發しながら、その空氣を吐き出すのであつたが、おまけにその度ごとに兩腕を振り立てて半身をおこす様子は、さながら何もものかから解き放たれようとしてゐるか、何ものかを脱がうとしてゐるかのやうであつた。

ザハーリヤは氣も遠くなる思ひでこの光景を見まもつてゐたが、古びた寢臺の板はますます重たげにへし曲つて、斷末魔のアヒルラの下でめりめり音を立て、壁は不氣味にうち顫へて、さながらその中から、長いこと押し籠められてゐた四大の力が、自由の天地へ躍り出ようとしてゐるかのやうであつた。

『そろそろ臨終ではあるまいか？』とザハーリヤはふと氣づくくと、小さな供物臺をとり窓邊へ走せ寄つたが、ちやうどそのときアヒルラは、くひしばつた齒ごしにかう絶叫した。――

「誰だお前は、その火のやうな顔をした奴は？ おれの道をあける！」

ザハーリヤはおづおづと後を振り返り、すつかり度を失つてしまつた。火のやうな顔をした者なんぞは一人も見えなかつたが、怖しさのあまり彼には、アヒルラが自ら自分の身を飛び出して、此處のどこやらで誰かと組打ちをして、遂に相手を組み伏せたやうな氣がしたのである。

氣の小さい老人は總身をかくく顫はせて、眼をしつかりつぶると、そのまま部屋から駆け出して行つたが、やがて數分ののちには、僧院の鐘樓の上で、逝いたアヒルラのための弔鐘が悲しげに撞き鳴らされたのである。

古スクリイ・ゴロド市の年代記もいよいよ大尾に入つたが、それに最後の終止符を打つものは、ザハーリヤのお棺の蓋に打たれる釘でなければならなかつた。

物静かな老人は、長らくはサヴェーリイアやアヒュラのあとに生き残つてゐなかつた。彼はわづかに春の大祭り、復活祭まで生きながらへて、ちやうど勤行の最中に眠るがごとく、みまかつたのである。かうして古スクリイ・ゴロド市の僧職がその顔觸れを一新する時が來たのである。

—下巻了—

解 説

レスコーフの名はわが國に殆ど知られてゐない。だがこれは何もわが國に限られた現象ではなく、西歐諸國にあつても程度の差こそはあれ、本國であれほど有名なこの作家が一般に紹介されることは、意外に少いのである。

その理由として先づ挙げらるべきは、彼の作品の翻譯不適性である。すなはちその文體・詞藻があまりにも濃密・豊饒・奔放であると同時に、あまりにもロシア民族的であり、のみならずあまりにも個性的であつて、外國語による鑑賞を殆ど絶望的ならしめ、したがつて翻譯業者の企圖心を、作者にとつては幸福千萬にも、事前に打ちくたく魔力を藏してゐるといふ事情である。

理由の第二として挙げらるべきは、わが國はもとより一般に諸外國の讀書層にあまねく浸潤してゐるところのロシア文學に對する或る種の既成の觀念ないしは偏見に、この作者が従順でないといふ事情である。これを具體的に言つてみるなら、あるひは政治的な思想性、あるひは觀念的な深刻性、あるひは残忍なまでの憂鬱性等々といった多分に文學青年的なロシア文學觀の枠に、このロシア人の本然と、現實に通曉することあまりにも廣く且つ深い純粹なロシア作家が、主としてその奇怪なまでの色彩の強さと眩いまでの諧謔味とによつて、當てはまりにくいといふ事情である。

第三の理由として擧げられるのは、このレフ・トルストイよりも僅か三歳の年少にしかすぎない作家の文壇的登場が稍々おくれ、あたかも左右兩翼の争ひが未曾有の烈しさに達した一八六〇年代に入つてからであつたため、そのいづれの黨派にも生涯を通じて屬することのなかつたこの作家が、一般讀書界において博した人氣といはば反比例的に低い地位をしか、當時ほとんど左派の壟斷するところとなつてゐた文藝批評によつて本國の文藝史上に與へられてをらず、したがつて主として文學史的な興味をもつて紹介の基準としがちの世上一般の外國文學紹介者の眼から逸せられがちであつた、といふ事情である。

以上、彼が外國において知られることの少ないおよそ三つの理由が、實はそのままにこの作家の特質を形づくるものであることに讀者は既に氣づかれたことであらう。それを手短かにいへば、彼がロシア十九世紀の錚々たる世界文學的巨匠のあひだに伍して、ある意味でもあまりにも純粹に民族的な作家であつたといふことである。

では彼は一體どういふ人であつたか。

ニコライ・セミョーノヴィチ・レスコーフ（一八三一—一九五）は、トゥルゲーネフの故郷として有名な歐露オリョール縣の片田舎で生まれた。幼時を富裕な伯父の家ですごした彼は、十六歳のとき天涯の孤兒となつて、自活生活をはじめなければならなかつた。そして地位の低い役場の書記として縣から縣へと轉々するあひだに、ロシアの特に地方民の現實生活の種々相にひろく親近する機會を得た。

のである。更にその後、ある富裕な地主の家令をしてゐたイギリス人のもとに備はれるに及んで、彼の人生知識は益々ひろい展望を加へた。かうした彼の人生修業が、同時代の貴族出の大家作家——トルゲーネフやレフ・トルストイ——の、地主の子弟がやうやく長じて獨逸や佛蘭西あたりの大學直輸入の理論で身を鎧ふといつた行き方と頗る趣を異にするものであつたことは、まづ注意されなければならぬ点である。レスコーフの場合、その人生學は實踐的な、あくまで自主的な觀察の賜物であつたのである。ロシア人の生活に對する彼の見方に常套的なところが微塵もなく、農民に對するわざとらしい追從的な態度や感傷的な憐憫の跡が見あたらぬのは、一にこの故であると見なければならぬ。

一八六二年、三十歳にして彼はペテルブルグに出て職業的ジャーナリストの群に投じたが、右に述べたやうな實踐的な人生行路を辿つて來た彼としては、徒らに空虚な激語を弄ぶにすぎぬ非實踐的な黨派に加はることは、左右のいづれを問はず、もとよりできぬ相談であつた。なかんづくこの頃彼が何氣なしに書いたペテルブルグの大火に關する記事が、いたく左派の人々を刺戟し、彼らの激しい誤解と反感を買つて以來、この派の門戸は彼の前にその生涯を通じて永遠にとざされてしまつたのである。

やがて雜文生活から小説に筆を轉じた彼は、一八六四年に長篇小説『どんづまり』を世に問うた。これは續く長篇作『角突合ひ』（一八七〇—七一）と共に彼の初期の特徴である政治小説的な傾向を代表するものであるが、この前者が所謂ニヒリストたちの内部の腐敗を容赦なく寫しだした幻滅物語

であつたこと、殊に後者にあつては更に一步を進めて彼らを宛然ごろつき・追剥ぎの寄合ひととして描き出したことは、いやが上にも彼の上に反動作家の烙印をあざやかならしめることになつた。それはさうとしてこれらの傾向的作品は文藝的に見て、もとよりレスコーフの名を高める所以のものでないことも事實であつた。

さうした初期の作品のなかにも、例へば婦人の犯罪的情熱を獨特なねばりづよい自然主義的客觀を以て追求した中篇『ムツエンスク郡のマクベス夫人』(一八六六)のやうな秀作もあるのではあるが、ともあれレスコーフの作品が漸く世に迎へられはじめたのは、ここに譯出した『僧院の人々』(一八七二)のやうな僧侶の風俗を扱つた物語、あるひは『封印された天使』(一八七四)のごとき舊信徒——いはゆる分離派信徒——の生活を描いた作品など、宗教上の問題に觸れた傑作が相ついで發表された一八七〇年代以後のことであつて、これとともに彼の本然に根ざす特異な文體も漸く花をひらいたのであつた。これらの作品を書いたレスコーフは、純樸な民衆信仰の代表者としての僧侶のうちに、義しい人間性や昔ながらの人ごころの美しさを見いだして、それを擁護し讚美してゐるのであつて、この限りにおいて彼はロシア正教の熱烈な味方であり、健全な意味における保守的理想の護持者であつたのである。

とはいへ、既にかうした作品の中にも、教會キリスト教に對する或る程度の嚴しい批判が宿されてゐたことは否むべからざる事實であつた。やがて彼は一層あからさまに正教々會に對して反傳統的な批判の態度をとるやうになり、一八七〇年代の末から八〇年代の初めにかけて成つた『僧正生活

片々』の如きは、僧侶階級の上層部に巢をかけたさまさまな俗世的惡徳に對する諷刺に満ちみちたものであつた。この傾向は一八八〇年代の彼の作品の主調をなすもので、なかんづく初期キリスト教時代に材をもとめた傳説的な連作のごときは、あるひは隣人への奉仕に生命を捧げる義人に對せしめるに俗化した教會僧侶を以てし、更には、キリスト教的モラルに對立せしめるに詩化された地上的人間愛を以てするといつた風の、一種異教的な趣をすら帯びた行き方を示すに至つた。一八九〇年代の晩年に入るや、この傾向は更に激しくなつて、教會キリスト教に對する狂ほしいほどの諷刺を湛へた『鬼の隠れ家』(遺作)や、あるひは皆て七〇年代の頃にはいたく私淑してゐたトルストイにすら嘲笑を向けて、その無抵抗の教義を擯斥した『冬の日』のごとき作品を生み出してゐるのである。

右のやうに、思想的・觀念的な方面から眺めた彼の生涯の姿が、ややもすれば固定感に乏しく、むしろ浮動的であり、あまつさへ自己分裂的ですらあつたことは、以上の瞥見からも容易にうなづかれることと思はれる。かうしてレスコーフは職業批評家の側からする同情には生涯ほとんど無縁に終始し、ロシア全國に廣汎な讀者を持ちながら、文藝出版界にはこれといつた知己を有せぬままで淋しい生涯を終へたのであつた。

では彼が一般讀書界にちか得た人氣はどういふところから來たものであらうか。實は彼を語る場合、これが問題の核心なのである。

「現在わたしは、わたしの想像的作品の美しさのゆゑに讀まれてゐるが、五十年もすればこの美し

さは色褪せてしまひ、わたしの本はその中に湛へられてゐる理念のゆゑにのみ讀まれるやうになるだらう。」そんな意味のことをレスコーフは、その死ぬ少し前に漏らしたと傳へられる。

この言葉は疑ひもなく、作者といふものが自己を豫言することにかけて如何に無能であるかを惜しげもなく露呈した堂々たる一例でもあるが、同時にまたレスコーフの熱い憧憬が奈邊にあつたかを正直に告白してゐる貴重な述懐とも見なければならぬ。

事實彼とても、人生や社會の批評者たらんと志し、説教者たらんと期した心構への誠實な點では、決して同時代の巨星たちに劣るものではなかつたのである。彼がニヒリストを目して實踐なき空論の徒となし、さらには自由主義的な氣風とすら生涯を通じて氷炭相容れなかつたことは、傳統主義者としての彼の氣骨を端的に物語るものであるし、なかんづく宗教の道に關心することの深かつた點では、トルストイ、ドストイェーフスキイの兩巨人に對して、鼎の一脚を支へるものとさへ言へるであらう。彼にあつてキリスト教的信念は、抽象的なドグマではなくして、民衆がこれを理解し表出するその仕方に於て把握されたものであつて、従つて彼の宗教的信仰が民族主義と表裏一體をなしてゐる點では、むしろドストイェーフスキイの宗教に似通つてゐた。その彼も中期に及んでいくとトルストイに影響され、一種の新生キリスト教的な傾向を帯びるに至つたことは前にも觸れた通りであるが、しかしこの兩者のあひだの類同といつても、煎じつめれば反僧侶的、非宗派的、純倫理的といつた面だけの話で、根元的には踰ゆべからざる溝が兩者をへだててゐたのである。すなはちトルストイの、精神的矜持や自意識的正義感を眞向にふりかざした純潔や理性の禮讚とはうらはらに、レスコーフの念願

し渴仰したものは唯々謙虚と哀憐と慈悲心とであつた。しかもその慈悲心たるや、精神的純潔はいはずもがな、肉體的な純潔をも泥土に委して悔なしといつた風な、ほとんど異教的なほどの烈しさを帯びるに至つたことも、前にちよつと述べて置いた通りである。

ところが折角のかうした眞理探求も、彼生得の活氣横溢なる感性の過剰に禍ひされて、終に確乎とした實を結ぶに至らなかつたばかりか、實にその奇怪な内面的相剋のありやうによつて、彼の歩みは同時代の大家連中の軌跡と鋭く交叉するのである。トルストイやドストイェーフスキイにあつては、その内的世界は壯大な矛盾を兩極に控へた峻嚴な求心的秩序を成してゐたものが、レスコーフにあつては内的矛盾は烈しい遠心力に支配されて、絢爛たる非秩序を現出したのであつた。すなはちレスコーフは人生を、その矛盾撞着の相のままに、その百花撩亂の姿のままに愛した。そのあるがままの光明と闇黒とに、おなじ愛着力をもつて惹かれた。一口にいへば、彼は人生に酔へる人であつた。美とか情熱とかいふものに對して貪婪な、饜くことを知らない人であつた。この欲望の多彩豊溢と、それに伴ふ同情の傷ましい分裂とによつて、彼は人生の教師になることはもとより、人生觀の上に確然たる自分の位置を定めることすらも、うひにできなかつた。彼のうちに見いだされる確乎不動のものといへば、極度に洗煉され研ぎすまされたきららかな藝術的人生感覺と、人間といふものに對する無限の哀憐と、僅々この二つぐらゐなものであつたと言へよう。その代り彼はこの二つの財寶を一種偏執狂的な意固地さを以て磨きあげ、その美と深さの極致に參入して、ロシア文學史上他に類例を見ない孤高の地位を築きあげたのである。

あらまし叙上のやうな契機から、彼の異常な力強さを有する個性的な作風や、過剰なまでに色彩の豊かな瑰麗な文體は生まれ出たのである。大いなる美德、極度に風變りな性格、はげしい悪徳、猛々しい情熱、怪奇な滑稽味、——かうしたものに彼は喉を鳴らして躍りかかつてゆく。彼は英雄崇拜家であると同時に、偉大な諧謔家である。彼は時としてロシアの生活を、犯罪と騒狂と豪勇の色もあやに相交錯した粗々しい見世物として賞翫することをすら厭はなかつた。なかんづく野放圖な諧謔調によつて高らかに伴奏される英雄崇拜に至つては、レスコーフの最も得意とするところであつて、この邊から彼の血統をたづねて行くと、いま手許に彼の文學修業に關する精確な資料の持合せがないので固よりはつきりした断定はくだせないが、あの情熱探求家バルザックなどは易々と乗りこえて、遠くラブレにまで遡り得るのではないかとさへ思はれるほどである。それはとにかく彼のかうした面は、とりも直さずロシア民族の血の中を流れる賑やかな逞しい嬉笑的要素のやや強調された表出に過ぎないのであつて、その浪漫的な作風にもかかはらず足はしつかりと大地を踏みしめて、いささかも危げな浮游の感をもよほさせないところは、さすがにロシアの人情風俗の奥底に分け入つて養はれた彼の現實觀照の眼の確かさを物語つてゐる。

レスコーフの文體について言へば、絶倫な話術の大才とでも呼ぶほかはないであらう。際限もなく挿話を重疊し地口や洒落を連發しながら滔々として迂曲錯雜を極める彼の説話體は、一たび綱を放たれた奔馬のごとく、奔逸してとどまるところを知らない。豐饒な獨特の語彙を驅使して描かれてゆく彼の畫面には、夥しい細部が丹念に描きこまれて、朦朧とかニュアンスとか、雰圍氣とか、あるひは

しつとりとくすんだ味ひとか、さういふものを徹底的に缺いてをり、ことさらどぎつい色彩や、思ひきつた高浮彫や、するどい輪郭やを、粗々しい筆觸をもつて生々しい白日光のもとに浮びあがらせるのである。レスコーフを愛することの深いいはゆる形式派の批評家ミールスキイが、この彼の文體の繪畫性に觸れて、トゥルゲーネフやチェーホフの世界をコロの風景畫に譬へれば、レスコーフのそれは明るい色彩と怪奇な形態とに充満したブリュエルの繪畫であると言つてゐるのは、けだし適評であらう。

ここで彼の語彙の特徴についても一言ふれておく必要がある。彼は讀者が夢にも豫期しない繪畫的な成句を使ひ廻すのであるが、なかんづく彼の最も得意とするのは、俗語化された古代教會スラヴ語のもつ滑稽な効果であつて、かうした俗語が内に含んでゐる破格の面白さや、その響や味を最大限に發揮させながら奔流してゆく彼獨特の話術にかかつては、外國語に翻譯することの不可能はもとより、その滋味を汲みわけ味ひつくすことすら外國人にとつては殆ど望みえない事柄であらう。

ここに蕪譯を試みた『僧院の人々』は、レスコーフの全作のなかで最も人々に愛されてゐる作品である。これは彼としては比較的初期に屬する作品で、右に述べて來たやうな彼の特色を未だ極端に發揮したのではない。もしその種の極端と異色の典型をもとめるとしたら、彼のなかんづく得意とする第一人稱による説話體で綴つた中篇小説『魅せられたる遍歴者』(一八七四)に見られる飽和と奔逸と波瀾重疊ぶりに當然指を屈すべきであらうが、『僧院の人々』におけるレスコーフは、これなど

に比べれば頗る穩健な作風を示してをり、全篇を支配してゐる調子も概して落着いた、時にはしみじみとした情趣ですらあつて、これが一般の讀者に親しまれる所以をなすものであつたに違ひないのである。

『年代記』と銘うたれてゐるこの作品は、この言葉のもつ古來の素樸な響きをそのままに、小説じみたせこましい構成に縛られず、章の區ぎりや各篇の均衡なども極めて暢氣にうち任せて、心の向くままに悠々たる逍遙の杖を風俗の並木道に曳いてゆくといつた趣を呈してゐる。その舞臺に用ひられてゐるのは、作者の生まれ故郷であるオリョール縣の片隅にうち忘られて昔ながらの純樸な眠りをむさぼつてゐる町の、僧院を中心としたごく狭い一世界である。オリョール縣といへば、トゥルゲーネフの故郷としてその風物はこの文豪の筆をとほして夙にわが國の人々にも馴染の深い土地であるが、當時は未だいささか文化の潮にとりのこされた觀のあつた地方で、そこに假想された町に作者が『古市』といふ象徴的な名を與へてゐるのは偶然ではないのである。

さてその古市の古びた僧院のうちそとに、あるひは生を愉しみ或ひは世を歎く純樸な人々の風俗や氣質を、興の赴くままに寫しとどめたのがこの作品であつてみれば、ことさらめいた註解などは一切さし控へて、蕪雜な譯文をたよりにその滋味の萬分の一をでも汲みとつていただくに越したことはないのである。が、念のため一二の蛇足を添へて置くとすれば、――

本篇の主人公である老いたる司祭長トゥベローゾフは、その名の月下香トウベローゾフの奥床しさをそのままに、レスコーフの豊富を極めた畫廊の中でも、『正義の人』の最も成功した肖像畫にぞくしてゐる。その

飽くまでも人間的な温かさを底にひそめた豪壯不羈な性格と、純眞な喜びと惱みとに満ちた生活とは、なにかんづく篇中で大きな頁を占めてゐる彼の日記の中に躍如としてゐるが、同時に、この條りがレスコーフの古語趣味の最も横溢した部分で、その古式の屹々たる文體に步調を合はせるため、譯者はやむなく不熟な擬古體に走らざるを得なかつたものの、その効果については頗る忸怩たるものもあることも、併せてここに告白して置きたいのである。

もう一人の中心人物である補祭アヒルラは、本文の中にも註記したごとく、その名をホメロスの傳說的英雄アキレスに負うてゐる。この途方もなく旺盛な、おそろしく粗野で人情ぶかい、その上まるで幼兒のやうに頑是ないコサツク出身の補祭が、ひつきりなしに演ずる頓狂をきはめた脱線ぶりと驚天動地の茶目ぶりは、ロシアに住む人間の無邪氣で野放圖な一面をみごとに擴大鏡裏にとらへたものであつて、讀みすすむにつれて彼を愛せずにはをられなくなりやうな人は、恐らくこの世に一人もあるまいと思はれる。補祭アヒルラはひとりレスコーフの性格創造の中で最も偉大なものであるのみならず、ひろくロシア文學を通じても優に絶巔に位する一タイプと稱して過言ではない。

そのほか、義理に篤い侏儒の老人あり、三代の帝に歴仕した一貴族夫人あり、輕薄な合理主義者の群あり、敬虔な農民あり、豪放な舊軍人ありといつたふうで、登場人物は多彩を極めてゐるのである。その錯雜を巧みに處理しながら、親しみのうちに感動をひそめ、笑ひのかけに涙を點じ、道化味の裏に崇高を宿してゆくレスコーフの大手腕に至つては、ただただ呆然として心を奪はれるのほかはないのである。

僧院の人々 第二卷

譯者 神西 清

刊行 思索社 片山修三

東京都千代田區代官町二

印刷 曉印刷 中内佐光

製本 鈴木製本 鈴木俊一

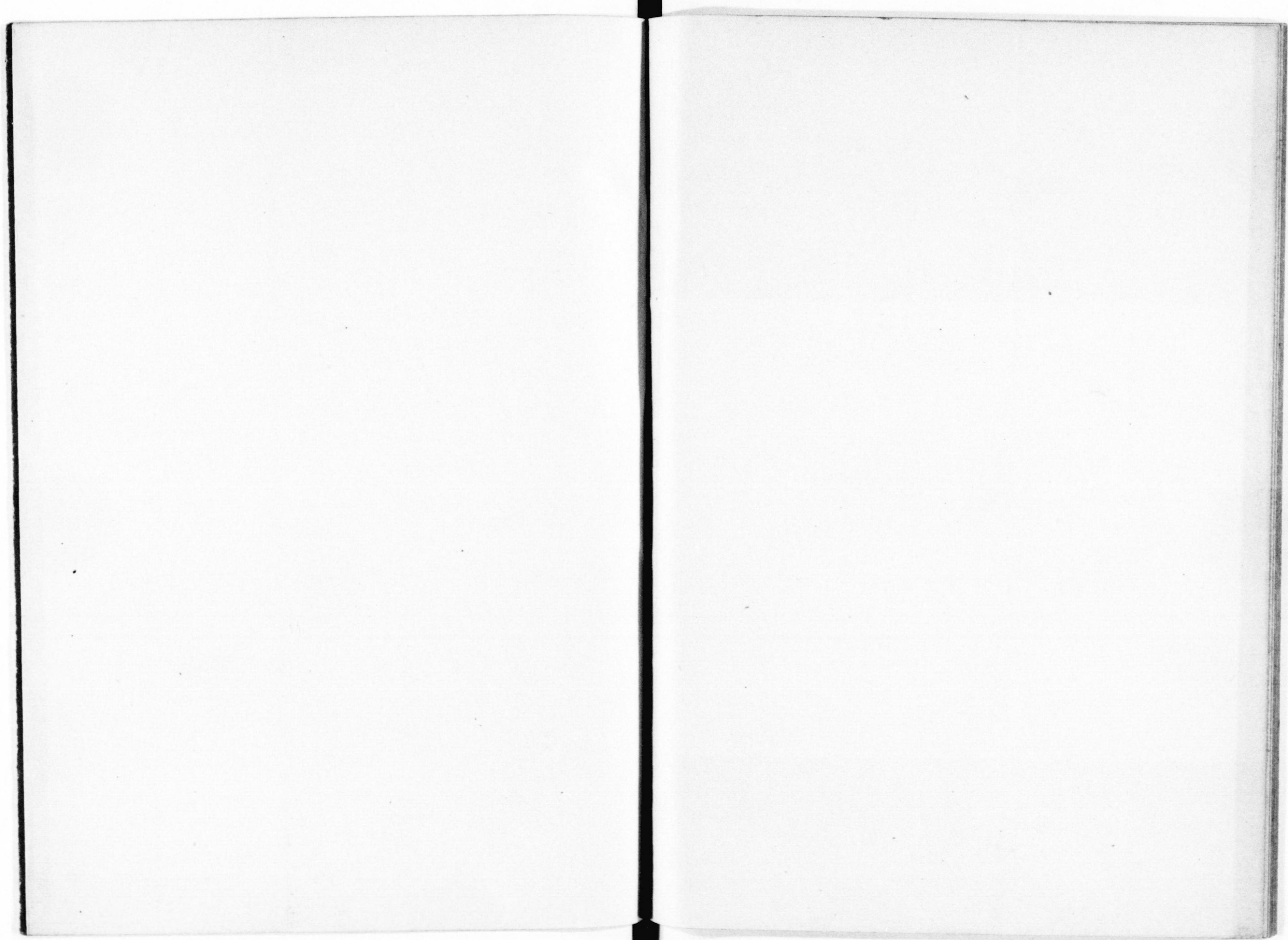
一九四九年九月二〇日 印刷

一九四九年九月三〇日 發行

思索選書 104

定價一八〇圓





終

思 索 社